

停止したままの運転席。ぼんやりと座る私。開けた窓に右肘をつく。

視界の右に動くものを感じる。見ると、蛇。数メートルもあるような大きな蛇がこちらを伺いながら、身体を宙に浮かせる。

目が合う。

えっ、とたじろぐ。が、どうすることもできない。蛇に睨まれた私。恐怖で身体が固まる。そんな私に向かって蛇は、スルスルと窓から入ってくる。ひーっ、と身の毛がよだつ。噛まれたらどうしよう、と思うが、この辺りの蛇なら大丈夫、とも思う。シートに背中を強く押しつける。蛇はその大きな身体をくねらせ、私に関心がないかのようにはハンドルの方に身をよじり、そのままダッシュボード伝いに助手席の窓から出て行く。その腕よりも太い身体を、ホッとした思いで見送る。

「あのう、すみません、一台借りられますか」

「ハイ、イイですよ。コチラニゴジュウシヨトオナマエ、デンワバンゴウヲ、カイテクタサイ」

こんなところにも中国の人がいるのか、と驚きを悟られないよう、自然に振る舞うように気をつかいながら、なんで気をつかっているんだろうと思った。それでも少しゆっくりめに、はっきりと言葉を返す。電動自転車の扱いについて説明を聞き、愛想良く笑顔で軽く会釈をして、サドルに乗りベダルを強く踏み込む。

初夏の空気が気持ちよく全身をすり抜けていく。当面行く当ては一カ所だが、どうやってそこに行けばいいのか。乗り慣れない電動自転車にハンドルのふらつかせる。進む先々で、同じような観光客が、あそこがどうか、あっちがどうか、指で示す顔が屈託なく輝いて見える。

ショップで無料で配られていた、ひし形のような島の地図をあらためて広げる。午後に行くであろう目的地は左隅だ。とりあえずそこまで行ってみようか、と観念したようにそこまでの道をたど

変な夢――

その日の朝に見た夢を思い出し、嫌な気分になる。何かの暗示か、体調によるものか、たまたまの偶然か。

夏のような日射しに、眩い海からの反射光。まだ肌寒さは残るが、着実に進んでいる季節を感じる。

高速艇を降り立った船着き場であたりを見渡した渚は、想像していた以上にさびれた感じの港に、一瞬途方に暮れた。予定していた人物に会うのは午後だから、午前中はまるまる何も無い。夕方には予約している民宿に入るとして、午前中をどう過ごすか。

先に降りた数組の観光客は、みんなして同じ方向に進んでいた。そこに何かがあるのだろう。間をあけてあとを追う。客のカップルやグループが溜まっていたのは、観光客向けのレンタサイクルショップだった。そこで借りた電動自転車で島内をまわるのだ。前の数組の客がさばけたところで、若い女性に声をかける。

る。

漁港特有の狭い路地を抜け、少し広めの自動車道に出るが、一台の車も走ってはいない。観光客を見かけた場所からはほとんど遠ざかっていく。見渡す限り信号機らしきものも見当たらない。

人の気配がない。限界集落という言葉が頭をよぎった。限界集落と観光地。奇妙な取り合わせのようにも感じられるが、それが今のこの国の現実だと認識する。

お地藏さんがいくつも並んで立つ丁字路を左に折れ、緩やかな山道を登っていく。電動自転車であるのが幸いだ。道沿いに、一見してオリブの木だと分かる植林がある。看板まで立っているが、誰に向けられた看板なのか。

下り道になり進んでいくと、視界が開け海が一望できる場所に出た。海水浴場と書かれた看板が目に残る。夏になれば誰か来るのかしら。もしかして観光客？そんなふうにも思えない。小さくとも綺麗な砂浜なのに、ここにも人の気配はまるでない。

背中に浮いてきた汗がシャツにへばりつく。アスファルト舗装は途切れ、砂利道に変わる。ここから先は観光地じゃないのよ、とでも言われているようだ。石切場のような作業然とした、さびれた空き地を横目に進むといきなりあらわれた。

「関係者以外立入禁止」

「立入禁止」だけ赤で大きく書かれた看板が、鉄柵に貼りつけられている。その錆びついた看板を前にして、仕方なく自転車から降りる。鉄柵に手をかけ覗き見るが、そこから先を伺い知ることができない。それでも、ここか、と思う。胸の奥にべっとりとはべりついた、どす黒い何かを感じる。

古民家を改装したような古めかしい店には、すでに数組のカップルや女性客がいた。テーブルもいすも、手作り感満載の木製だ。綺麗というのではない。しっとりとした手触りで心地いい。

「何になさいますか？」

島の住人ぼくはない若い店員が尋ねる。

キャと話すような相手もない。ひとりて考え、行動するしかない。

昼過ぎ、高速艇で着いた待合所で座っていると、いかにも人探しをしているといった素振りの年寄りが入ってきた。

「植村さんですか？」

渚が言って歩み寄ると、その年寄り、立花さん？と声をかけた。

「はじめまして。すみません、今回は——」

言おうとすると、いやー、よかったよかった、とマイペースに応じた姿を見て渚は、やっと地元の人間と会えたような気がした。

「この人がな、今日話してくれる石川さんいうてな、何でもよう知っとるから」

植村の後ろから別の男性が現れた。朴訥とした、誠実そうな印象のおじさんだった。

「今日はね、他に島の高校生も二人、一緒に話聞くことになってるから。こっちでね、手続きしてね」

「何か食べ物は」

「あとは切らしちゃって、もうこれだけなんです」

そう言って、掌でメニューを示した。

島ソーメン。

「じゃあこれで」

店員はすみませんと恐縮しながら、店の奥に引っ込んでいった。

日本の漁港としては似つかわしくないような、どこか南の島国でも思わせるようなBGMを聴きながら、このあとのプランを確かめる。

昼食のあとは、高速艇を降りた船着き場まで戻る。研修に行くために指定された集合場所だ。研修にかかる時間がどれくらいだろうか。恐らくそのあとは、今日民泊する宿に入ることになるのだろう。

翌日は、帰りの船便まで特に予定はない。せっかくだから観光地を見て回ろうか、と思うものの、実のところ島のことはほとんど何も知らない。かといって周りのカップルや女性客のようにキャッ

植村と石川に先導され、渚は待合室の一角にある事務所のような場所に連れて行かれた。こぢんまりとした部屋はいかにも事務所といった趣だ。一人でいた女性が親しげに植村と石川に声をかける。どうやらみんな旧知の仲のようだ。

ということ、みんな事件のことはよく知っているってことなのだろうか——

人は忘れる生き物だ。たとえ大きな事件であっても、もう昔のことといえば昔のことだ。昔のこととなれば口を閉ざす人がいてもおかしくはないし、若い世代や子どもは、語り継がれない限り知ることはない。残念なことだとしても、それが世の常であることは、渚も分かりすぎるくらいに分かっている。にしても、この人たちはどうなのだろうという思いが募る。ましてや同行するという高校生たちはどんな動機で参加するのだろうか。そのあたりにも興味を傾く。

必要事項に記名をして研修費用を支払うと、じゃあ行きますか、と植村に声をかけられ外へ出る。「このあとは石川さんに案内してもらって。えーっ

と、終わるんが何時頃かな？」

石川が、四時ぐらいですかね、と返すと植村は、「じゃあ終わったら電話ちょうだいよ。そしたらまた迎えに来るから」と渚に言った。じゃあ石川さん、よろしくね、と言って白い軽自動車に乗り込んで行ってしまった。

「じゃあ行きますか。高校生の二人は車にいますので」

よろしくお願いします、と言って石川の後ろをついて駐車場に行くと、言っていた通り後部座席には高校生の男女がかしこまって座っていた。車はやっぱりの白の軽自動車だ。

乗る前に、助手席のドアを開けたまま、こんにちは、と声をかけると、こんにちは、と爽やかな声が跳ねてきた。お願いします、とシートに身体を滑り込ませ訊いた。

「この島の高校生？」

「あ、はい。島いうても、この島には高校はないんで、隣の小豆島です。地元はこの島やけど」

男の子の方が快活に答えた。

あんま覚えとらんのです。酷かったという記憶はあるけど。ほんで、もういっぺん行ってみようか言うて」

「言うたんは俺やで！」

割って入ってきた弘章を、美海の視線が刺すのが、車の前方を見ているも伝わってきて、渚は少し笑った。どうやらつきあっているような特別な関係ではなさそうだった。

「あそこ、今どうなっとんやろいう話になって、せやから俺が行ってみよういうて言うたんや」

運転しながら石川も少し笑っていた。

「そんな高校生がおるいうのは嬉しいことですよ。なんせ、五〇年近く前からの話やから。この子らの生まれるずっと前に起きたことやからね」

白い軽自動車は、午前中に渚が自転車で通った道と同じ道を、豪快なエンジン音を立てて進んでいく。

「それでもどうにかして語り継いでいかんといかん、て思うんやけど、人間ていう生き物は何というか……」

「そうなんだ。はじめまして、立花渚です。よろしくね」

「あ、俺、内田弘章です。よろしくお願いします」

隣に座っている女の子に自己紹介するように合図を送ると、「もう、何馴れ馴れしく話してんよ」とでも言いたげな目で、それでも少しはにかみながら応じた。

「はじめまして、澤村美海です。よろしくお願いします」

何年生か訊くと、すかさず「三年です」と答えた弘章を、隣で美海が睨んでいた。

「仲がいいんだね」

「いやいや、こいつは調子がええだけやから」と、美海が答える。

「二人は現地、初めてなの？」

あ、と二人が同時に声をあげると、二人はやっぱり目線を合わせ、ばつが悪そうに弘章は口を噤んだ。一瞬間があいて、美海が続ける。

「中学生の時にいっぺん来たけど、詳しいことは

石川の言葉の真意をはかりかねながら渚は言葉を継いだ。

「喉元過ぎればっていうことですか？」

「まあ、そういうところかな。詳しいことは現地見てもろて、それから資料館でお話ししますよ」

鉄柵の錆びたフェンスは、渚が午前に見たように閉じられてはいなかった。開かれたフェンスを、白い軽自動車が砂埃をあげ走り抜ける。初めて見る景色が開ける。大きな建屋はいったい何のためものか。プレハブ小屋も見える。

少し登った坂道で車は止まった。

「降りて見ますか」

石川の言葉に頷き、渚は助手席のドアを開けて出た。

音はない。晴れやかな青空に瀬戸内の長閑な水面が広がる。遠くに大型船が浮かぶ。その手前に不釣り合いな、広大な「造成地」が広がる。しかしそれは「造成地」ではない。そのように見えるだけで、実際は、廃棄物を取り除いただけの、極

めて人工的な土地だ。豊かな自然に囲まれているからこそ、不釣り合いに映る。

美海と弘章も降りてくる。

「ここですか」と尋ねる渚に、石川が答える。

「そうです。ここから九〇万トンを超える産業廃

棄物が、隣の直島に運び出されました」

「それじゃあ直島が酷いことになるんじゃないですか」

「そうではありません。直島に無害化処理される施設が作られて、再利用されました」

「すべてですか？」

「すべてです。それが条件でしたから」

石川の言葉に、一步も譲らないといった覚悟が滲む。

香川・豊島事件——豊島産業廃棄物不法投棄事件

戦後日本で起こった最悪の産業廃棄物不法投棄事件。一九七〇年代、車で一周しても三十分もかからないような瀬戸内の小さな島の一角に、産業

個の問題ではなく、有機的に結びついて再評価され、そこで得た知見を生かし、これからの社会のあり様を補完することになるのではないかと感じたからだ。

大量生産と大量消費。そんな社会が良い状態だとは思えない。自然に還元できない化学物質の身勝手な廃棄。それにより引き起こされる海洋汚染、自然破壊。人間社会が必要以上に排出する二酸化炭素。それによる地球温暖化。温暖化が引き起こしているであろう高温、豪雨、豪雪、干ばつ、自然火災、異常気象。この現象が良い状態だとは到底思えない。にもかかわらず、人間による無秩序な経済活動は今なお突き進んでいる。どうにかして止めなければと思うものの、自分一人の力ではどうしようもないと思う。にしても、何もしなければ着実に社会経済は破綻する。そして、人類も減じる。国連が提唱し、国家間レベルで大きく変化しない限りどうしようもない。どうしようもないと思いつつも、個人レベルでできること、個人レベルでもしなければならぬことがあるはず。

廃棄物の不法投棄が始まる。事業許可を出した県と計画段階から反対していた島の住民がもめにもめ、一九八〇年代に深刻化。一九九〇年には兵庫県警が大規模な摘発に入る。一九九三年には島のほとんどの世帯が公害調停を申請し、七年をかけて二〇〇〇年に成立。ようやく解決への道を歩み始める。二〇〇三年から廃棄物を隣の直島に運び出し、それを終えたのが二〇一七年。搬出するだけで十五年かかった総重量は、九一万トン余。現在は地下水の浄化処理や原状回復をどうするかが課題となっている。

ここまでのことは予備知識として入れておいた。当時社会を揺るがす一大事件として取りあげられていたことも、何となくは理解していた。ネットには動画もアップされていたので、どれくらい酷い状況だったのかも、頭では理解していた。

渚がこの事件に注目したのは、それが日本の循環型社会への転換点だと感じたからだだった。国連が提唱する、SDGs「持続可能な開発目標」と直結するのではないか。豊島事件はSDGsと別

そう思い至り、行き着いたのが、豊島だった。

「ここは、元は事業者の事務所だったのを買い取って資料館にしたんです」

事務所と言うけれど、それはプレハブ小屋だった。中に入ると、学校の文化祭で展示されているような模造紙や写真が、すべての部屋の壁一面にびっしりと貼りつめられ、展示されていた。なかには産業廃棄物の標本やはちまきなどもあり、資料館といえば資料館だ。

「うわー、懐かしいな」と言う弘章に、「ここ、ここ。中学んときに来たよな」と美海が応える。

石川の話は、この事件の発端となる土砂採取、事業計画、許可申請、そして一九七六年の高共丸の迷走に始まり、様々なエピソードへと及んだ。

一九七七年のことです。当時の知事がこう言いました。

「人間が活動すればゴミは出る。出たゴミはどこかで処分しなければならぬ。法があるわけだから

ら、法に従って処理をすれば、豊島の住民が恐れるような環境破壊や健康被害は起こらない。それでも反対するというのがあれば、それは事業者へのいじめであり、住民エゴである。豊島は海は青く空気はきれいだが、住民の心は灰色だ」

指導監督を怠ったうえに加害事業者を擁護するかのような発言に、住民は激怒しました。香川県を離れて岡山県に移るといふ離県決議が出たほどです。

一九九一年に加害事業者が逮捕され、県としての責任が問われ糾されたときには、「気に入らなかつたら、知事を訴えたらどうですか」と、住民を罵倒する有様でした。

それでも一九九三年には公害紛争処理法に基づき、公害調停申し立てを、島のほぼすべてに当たる五四九世帯主が申請人となって申請しました。

ここで石川は、まるで楽しかった、懐かしい思い出話でもするかのように表情を緩ませ、語りはじめた。

だけの無秩序な喧嘩もあるが、秩序を守らんがため、互いの正義を全身全霊を賭けてぶつけ合う喧嘩もある。

勝つためにはあらゆる智力を総動員しなければならぬ。感情をほとぼしらせながらも、大局を冷静に見つめる判断力が求められる。また冷静に対応しながらも、打つべき杭を譲ることがあってはならない。

しかし本当に大切にすべきは、物事の真理を貫く、紛れもない人としてのあり様である。無欲で、まっすぐで、地を這いつくばるかのような行いに勝るものはない。

石川は続けた。

弁護団長は、ヴァイツェッカーの講演録「荒野の四〇年」から、「がれきの女」の一節を引用してよく話していました。爆撃によって破壊されたがれきを拾い集めて、もう一度教会を築こうとした一群の女性たちの話です。

「そんなもの集めて何になる」とほとんどの

翌年から公害調停が始まるのですが、第二回公害調停のときの弁護団長と調停委員長のやりとりは、まるで子どもの喧嘩でした。調停委員が、「県の調査結果を検証し、必要があれば追加調査を」と言ったのに対し、弁護団長は、「調停は不調にしていた方がいい」と返したのです。

「調停委員会に頼った私たちが間違っていた。不調にしていた方がいい。しかし、ただでは済まさない。下には報道関係者が待っている。いかに公害調整委員会が役に立たないかを言いつけてやる」と言い出したのです。これに対して調停委員長は、「横暴だ！」と叫びます。すると今度は、「横暴とは何だ！」と怒鳴り返します。怒鳴り合いは繰り返され、一時休停になりました。

もともと問題視されていた県の調査結果を前提にすること自体、公正性に欠けるとの判断で弁護団長が言ったわけです。

大人の喧嘩にもいろいろある。感情にまかせた

人々は嘲り笑いました。それでも彼女たちはがれきを集め続けました。当時、ドイツ国民の内面すべてが崩れようとするのを支え、自分を取り戻したのは、まさに彼女たちのような人々のおかげだったと称え、「人間の光が消えないように守り続けた存在」として話したのです。

刹那、渚にはその話が、南米に伝わる「ハチドリ」のひとしずくと重なった。そして、同じその精神で地道な活動を続けている仲間の存在と結びついた。

私だけじゃない。物語のお話でもなく、実際にそうやって時代を前に進めてきた人たちがいた。高名でも有名でもない。その名が語り継がれることがなくても、それがたとえささやかでも、自分のできることを懸命にやってきた人たちがいたんだ。

渚は感動に震えた。

一九九九年、二年ぶりの公害調停が開かれたと

11/62 きには、二十一世紀を循環型社会とする目標が掲げられました。

最善と考えられる先進的な技術システムを活用し、「後世にツケを回さない」という考え方を基本に、副生成物を再利用すること。すべての関係者が参加協力して、新たな価値観を創造し、問題を解決すべきことなどが調停委員長から説明され、住民側と香川県は同意しました。

翌、二〇〇〇年六月六日。

島で行われた公害調停調印式の壇上、知事は住民の前で涙ながらに謝罪をしました。

「県が廃棄物の認定を誤り、指導監督を怠った結果、豊島住民に対して長期にわたり不安と苦痛を与えたことを認め……」

知事の言葉に、会場に集まった六〇〇人を超える住民たちも泣きました。苦悩し、自問し続けた知事の話にまた涙し、豊島住民はそれを満場の拍手で受け入れたのです。

調停委員長からは、住民に対して「不撓不屈の取り組みに心から敬意を表する」としたうえで、

12/62 発信し続けることができれば――

ましてやSDGsが声高に叫ばれる現代において、この取り組みは紛れもないモニユメントであり、シンボルとなる。

二〇〇三年の技術委員会で、当時の委員長がこんなふうに語っています。「循環型社会は、サステイナブル・ソサイアティというのが一番適切ではないか」と。

さらに遡ること八年前、一九九五年に開かれた第一回豊島シンポジウムのタイトルは、「循環型社会をめざして」でした。

サステイナブル――

その単語に渚はハッとする。

サステイナブル・ディベロップメント・ゴールズ、SDGsだ。

私たちは決して、リサイクルを目標に循環型社会をつくっているわけではありません。リサイクル

「これからは、お互いに敵対関係ではなく、廃棄物を共通の敵として、互いに協力して事業を進め、第二の豊島の悲劇を起こさないためのモニユメントとしてほしい」と語られました。

正直、公害調停を申請したとき、実際に廃棄物の撤去が実現すると考えた人は誰もいなかったと思います。それでもやってこられたのは、「せめて一矢報いたい」という悔しきや、「死んでも死にきれん」という思いがあったからだと思います。そして、できるはずがないと誰もが思ったことに対して、我を捨てて必死になっている姿に、多くの人が共感し、声援を送ってくれました。そのことが、不可能を可能に変えていきました。

「壮絶」としか言いようのない石川の話。他にもそのような歴史はあるのだろう。しかしこれもまた確かに、「壮絶」な歴史の一つであることに間違いない。それを眠らせておいていいわけがない。歴史は繰り返される。が、歴史から学ぶのもまた人類ではないか。眠らせることなく、常に継承し、

はあくまでも一つの手段であって、大量生産・大量消費・大量リサイクルという考えに追従するつもりはありません。

供給量や使用量を少なくしていくと同時に、有害物質やその可能性のあるものは原則的に使用しない。どうしても使用しなければならぬ場合には、循環体系の中で使いこなしていく。出口で何とかしようという対策ではなく、後世代の人々や他地域にツケ回しをしない、負の遺産を残さないことを原則としています。

九一万トンに及ぶ廃棄物及び汚染土壌中の有害物を分解し、または金属として回収し、すべてを再利用するというのは、世界に類を見ない取り組みでした。しかしそれは、一般の人が見ても、これなら使えるというような資源に変えなければならぬ、という思いがあったからでした。

たまらず渚が質問した。

「それって、国連が提唱しているSDGsの考え方と同じだと思うんですが」

そのひと言に、石川が小さく笑った。「それを私たちは三〇年も前から、ずっと探り続けてきたんです」

渚は自分の認識に誤りがなかったことを確信した。

「これは——」

資料館の一室。壁一面に貼られた模造紙に、無数の名前が並ぶ。

「これは、調停申請をした人の名前です」

「これ全部がですか？」

「はい、五四九人、全部です」

言葉を失った。目にして感じる、その数の多さに。

「これ、うちのおじいちゃん」

その声の指す方に目をやる。

「美海ちゃんの手？」

一瞬目が合った美海は、ふっと軽く微笑んでうつむいたあと、「澤村雄一」という名前を見あげて言った。

終わることはないと分かっていた。それでもやっつけてこられたのは、子や孫に、この島の豊かな自然を残したいという思いからです」

つまり、当時すでに高齢だった申請人は、子や孫、それに続く子々孫々のために闘っていたということだ。一度破壊された自然を元通りに回復することが如何に困難なことか。

「これは、命を賭けた闘い」そう思い、模造紙に再び目をやったらとほほ同時に石川は言った。

「これは、終わりのない始まりだったんです」

やっばり語り継がれるべきだ、と渚は胸の中で呟いた。

*

植村の民宿は、港から少し上がった場所にあった。いかにも古民家といった風情の民宿から見下ろすと、そこには海に浮かぶいくつもの大型船が見えた。

「おもちゃみたい」

そう言う渚に向けて植村が笑った。

「あれでも割と大きなタンカーなんやで、見とる

「おじいちゃんもこの島を守るために闘った……」

まじまじと見つめる、美海の祖父という名前に黒いリボンを見つけ、渚は沈思し、ハッとする。

「このリボンで——」

渚が気づいたことを理解し、石川が告げる。

「亡くなった方です」

模造紙の至る所に貼られた黒いリボンに背筋がゾワッと沫だつた。

半数、いやもっと、六割、七割——

産業廃棄物のせいで亡くなったとは考えにくい。とすれば、高齢によるもの。尋ねると石川は、そうです、と頷く。

「まるで墓標——」

茫然と見上げたまま、渚は息を呑む。

「一九九三年に調停を起こした五四九世帯主のほとんどが、すでに他界しています。生きてその目でこの事件の顛末を見ることが出来る人はごく一握りでしょう。多くの人が、自分の代ですべてが

といろんなんがあって面白いわ」

にこやかに言う植村から視線を移し、船を眺めている渚に植村が声をかけた。

「疲れとるやるから、荷物置いてお風呂入ってこいせ。もう沸いとるから」

間を置いて返事をし、植村の案内を受けた。

古民家の割に綺麗に掃除がされている。無駄なものも一切ない。民宿客に対応慣れしているのが見える。少し広めのバスタブに浸かり、研修で聞いた一つ一つを思い出す。

想像以上だ——

ネットなどで知っていた知識なんかとは比べものにならない。それは動画であったとしても同じだった。太陽のぬくもり、頬をなでる風、鼻腔を通る潮の香り。視界すべてに映る、穏やかな瀬戸内の島々。五感のすべてで感じる、豊かな自然。それは動画では分からなかった。しかし、そのすべてを否定する、この事件。

「せめて一矢報いたい——」

そう言って闘った、全島民の歴史。悔しさ。ど

15/62 うしてそこまで頑張れたのか、その行き着いた先にあるものは。

伝えなきゃ——

そう思うものの、そのスケールを思うとき、自分なんかが手をつけていいものかと沈思する。その繰り返し、何度も何度も渚を襲う。

風呂から上がったことを告げに行くと、食堂にはすでに夕食が用意されていた。

「渚ちゃんはビールは飲むか？」

「あ、はい、少しだけなら」

民泊だからそんなに立派な食事はできないんだけど、と言いつつも、島の食事らしく、鯛を一匹塩焼きにしたものやら刺身やらエビフライやらが、食卓いっぱい並べられていた。

「これだけあれば十分です」

正直な気持ちだ。

「うちの家内が元気ならな、煮付けやら手の込んだもんが出せるんやけど、入院しとるもんやから」

16/62

んじゃないですか」

「ごくりと一口流し込んだビールが喉に染みる。

「うん、まあ、そう思うときもあるけど、独りが気ままでええときもあってな。それにこうやって民宿しとるといرونな人が来てくれて、話もできて楽しいし。いつまで続けられるかわからんけど、できるうちは続けた方が身体にええいうて、みんな言うてくれるしな」

強がっているようにも聞こえるが、恐らく実感でもあるのだろう。

「こんな小さな島やけど、結構歴史があるんやで」

そんな話でせっかくの客をしんみりさせては、と思っただ、話題を一転させた。渚も、「へえー、そうなんですか」と、眉唾な話として聞きはじめたが、そのあと聞かされたスケールは、渚の想像を超えていた。

「ほやな、まず西日本最古の貝塚があるわな。ヤマトシジミやら汽水域に生息する貝ばっかりやから、その頃はまだ今みたいな海にはなっってなかつ

缶ビールをプシュッと開け、一口注いだ。

「近くにですか？」

「近く言うたら近くやけど、島の外やからな」

「じゃあ大変じゃないですか。全部ご自分でされてるんですか？」

いかにも独り住まいをしている様子を探ねると、「まあな。子どもも、もう家を引き払って来んか言うてくれるんやけど、この家を放っとくわけにもいかんし」

植村の息子は本土で警察官をしていて、夫婦家族も一戸建て生活をしているという。

植村は渚にも飲むように、テーブルに置かれた缶ビールを勧めた。

「ほやから月に一度は息子のところに行って、家内のところにも見舞いに行ったりして、結構忙しいんで」

部屋の棚にいくつも飾られている写真立てに、家族の思い出が垣間見える。渚も缶ビールをプシュッと開けた。

「そうはいつでも、家で独りっというのも寂しい

たらしいな」

「えっ、瀬戸内海って陸だったんですか？」

植村の話によると、海面は今よりもずっと低く、瀬戸内は川から淡水の流れ込む湿地帯で、ナウマン象も闊歩していたという。その証拠に、象の牙や骨が底引き網に引っかかることもあるらしい。

そして数千年をかけて海面が上昇すると同時に、山々から流れ込む淡水で、瀬戸内は多様性に富んだ豊かな多島海へと変貌していった。まるで古代のスペクタクルロマンを聞かされているようだ。目の前の刺身までが、すごく滋養のある味のような気がしてくる。

「弘法大師にも縁があつてな、杖を突いたら水が湧いて出たいう湧き水もあるで」

これはさすがに眉唾物だ。渚は笑いながらビールを口にする。でも植村はいたって真面目に話をする。しかも、ビールが進むほどに、話は熱を帯びてくる。

「水が豊かやったということもあって、こんな小

さい島やのに早ようから水田が盛んで、戦後の疎開時には四〇〇〇人の食糧を自給しとったいうんやから、すごいやろ」

時代によっては余った米を移出していたこともある、と付け加えた。これはさすがにすごいと思っただ。しかも、大昔ではなく現代の話だから信憑性もある。島の回りが豊かな漁場であることを思えば、それだけの人口が自給していてもおかしくない。

「それに、この島は石でも有名やったんやで」

水の次は石か、と思う。

そういえば、朝見た石切場のような場所もそうだったのかも、と思う渚のビール缶は、二本目に移っていた。

「加工がしやすくて、平安時代には石の産地で有名やったという記録が残ってるんや。竈や流し、それにお寺の塔や、ほら、京都の——」

京都とまで？と驚いて言って、眉唾なのか、夢現なのか、分からなくなってきた。

「京都の桂離宮や！その灯籠とか、まあいっば

い残っとるらしいわ」

ビールのせいとか、話のせいとか、それとも疲れからか、朦朧とするなか、「千年にわたる豊島石」とか、「豊島千件石工千人」とかが耳に入ってくるが、渚の意識は途切れ途切れになっていた。

「疲れとるやろうから、もう部屋に行って休んだら」

植村の声に意識を取り戻し、素直に頷く。立ち上がりかけると、「今夜はぬくいから、もしかしたら明日の朝は霧になるかもしれんで」と付け加えた。

霧か、と特に気にも留めず、おやすみなさい、と返事をして部屋に引きあげる。

部屋に入ると、畳の上にはすでに布団が敷かれていた。場所が変わったからか、少し頭がスッキリしている。

とにかく、水や石、農業や漁業で、古より歴史を刻んできた本場に豊かな島だったということが頭に残る。

「近代に入ってから酪農が栄えたこともあり『ミルクの島』と呼ばれ、戦後間もなく先進的な福祉施設ができたことから『福祉の島』としても知られてきました。一九七〇年代から始まった産業廃棄物の不法投棄は、全国的にも最大規模の産廃問題となりましたが、不法投棄された廃棄物の処理もすみ、環境の再生を目指した取り組みが続いています。」

船乗り場で渡されたパンフレットに目を通す。

しかし、果たしてこれだけでどれだけの人がこの事件に関心を持つのか。ましてやこの島が抱えてきた、抱えさせられてきた問題がどれだけ観光客に伝わるのか。そこにいた人々の姿がどれだけ伝わり、どれだけ想像できるのか。そう思うと、暗澹たる気持ちになる。

スマホのアラーム画面を呼び出す。せっかく来た旅先で見られる景色が特別なものなら、早起きしても罰は当たらないか、とぼんやり思い、いつもより早い時刻をセットする。

布団に身体を横たえる。いろんな気持ちが押し

寄せ、思っていた以上に疲れが溜まっていたのだろう。慣れない、パリッとしたシートに身体を預けると、まるで敷き布団が泥にでも変わったかのように沈み込むような気がした。昭和感あふれる室内灯の明かりを消すより先に、そのまま意識が遠いていった。

*

アラーム音で意識が戻る。まどろみながら、スマホを手で探る。

5月2日 5:00

仰向けになったままゆっくり目を開けると、前の晩に見た昭和感漂う照明が目に入る。深く息を吐き出しながら、二度寝することをあきらめ、えいっ！と上体を起こす。遮光カーテンの縁が少しだけ明るい。

立ち上がり、カーテンを開けて目が覚めた。何も見えない。

真っ白——

窓を開けると、白が目の前を覆い尽くす。幻想的、神秘的でありながら、見ていてどこか恐怖心

が湧きあがる。

「今夜はぬくいから、もしかしたら明日の朝は霧になるかもしれない」

昨晚聞いた植村の言葉が思い出される。

「霧だ——」

小さく声が漏れた。湿り気のある、懐かしい匂いが鼻の奥にまで入り込んでくる。

民泊している家の庭先まではかすれて見えるものの、その先となると、いったい何があったのかよく思い出せない。海も見えた気がするが、距離感がなく、空恐ろしい。

白い悪魔に誘われるかのように、スリッパを履き、外へ出る。

朝の肌寒さに、両方の手のひらで二の腕を摩る。

昨日、植村の車に乗って来た道を下っていくと、簡単に港に出たような気がした。とはいっても見知らぬ土地で霧に遮られ、恐る恐る歩くしかない。岸壁から海に身を落とすようには思えないが、それでも心細さや気味悪さは残る。

音がない。霧が音の響きを吸い込んでしまうか

少年が渚に気づき、何者かと、しばしじっと見つめる。思わず恐縮した渚が、おはようございます、とささやくように軽く会釈をすると、つられて少年も、どうも、と会釈を返した。

そんなやりとりで気づいて、女性が我に還ったように顔を上げ、ふり返った。

「敦士」

ふわっとした調子で呼ばれた少年は女性の方に向き直り、連れていた柴犬に「ロス」と呼びかけ、母親と思しき女性と霧の向こうへと消えていった。

この島の人は毎朝、こうやって日の出を拝むのだろうか、と思ったりもしたが、その母子しかないことを考えると、そうでもないかと思った。

それにしても、深い霧だ。

*

「いらっしやいませ」

横に長く設計された、壁一面ガラス張りのイタリアンレストラン。窓ガラスの向こうに一望できる、雄大で長閑な瀬戸内の景色。その一番端の席に渚は座り、美海と弘章を待つ。前日の別れ際に

らだろうか。手探りしながら前へ前へと、コンクリートの地面を踏む。まるで少し明るいお化け屋敷みたいだ、と思っていたところに人の気配がして思わず身構えた。背筋がゾワツとする。立ち止まって身をかがめ、目をこらすと、霧の中にシルエットがぼんやりと浮かぶ。

人だ——

じっとしている。散歩にきている住民と見分けて、少しホッとすする。それにしても何をしているのか。音がしないように、一歩、また一歩、近づくと、足元から見あげていくと、海に向けて両手を胸の前で組み、うつむいているように見える。女性は何かに向かって祈っているようだった。

女性に気を取られていると、さらに奥から人の気配がした。いや、その前に小さな影が足早に近づいてくる。足を止めて再び身構える。

犬？の散歩——

少年が犬を連れて霧の向こうから現れる。スラッとした長身の少年だ。女性の方に近づいていく。

母子か——

渚が誘うと、弘章が、地元の俺らなんかはなかなか行けないから、と言ったりクエストによるものだった。

立派な観光地であれば平日の経営も成り立つのだろうが、こんな小さな島ではどうだろうと考えていたところに二人が入ってきた。軽く手をあげて二人に合図をする。

「ごめんね、家の用事で忙しいのに」

「いや、渚さんこそ、ヒロがええ加減なこと言うてしても。本当にすみません」

「えっ、俺のせい？」と言って、弘章がおどけるように、俺？俺？と愛想を振りまく。それを美海が、何馬鹿なことやってんの、と制止する。そんな二人を前に、渚が吹き出す。

席に座り、パスタやピザを注文する。

渚は前日の様子から、二人が特別な間柄ではないように感じてはいたが、その距離感は何もなくゼロに近く感じられ、どういった関係か気になっていた。

「ところで二人って、付き合っていたりする？」

間があく。訊いてはいけなことを訊いてしまったのかと、渚は一瞬息を飲む。が、すぐに、口を半開きにしていて美海が大笑いし、きっぱりと答えた。

「ちゃうわ」

あまりの簡潔な回答に、再度笑みが溢れる。

「そうなんだ」

「私ら島の同級生なんやけど、三人だけの」

「三人？もう一人いるの？」

「はい、おるんやけど、なあ」

「うん、もう一人おるんやけど、高校に上がるぐらいから家に引きこもって」

島民が今の何倍もいた頃は、一学年に一〇〇人ほどいたらしいが、今はもうそれも片手にも満たないと美海は言った。同学年に三人いることも珍しい方だという。急激な少子化に渚は茫然となる。全国の他の地方よりも圧倒的に少子・高齢化、過疎化が進行している。三人も中学までは島内であったが、高校からは、隣の小豆島にある高校まで毎朝夕、船で通っているという。船の便に合わせて

の生活は、部活動などにも制約が生じる。決して便利とはいえない。

「それで高校卒業したら、みんなどうするの？」

「まあ、それぞれかな。島の中の仕事は限られるし、やっぱり外に出て行くみたいなの」

「そうなんだ。そこに移住者が来るって、なんか皮肉ね。——二人は、どうするの？」

そう言うと、美海と弘章は互いを見て、どちらが先に口にするか戸惑う様子を見せた。そして弘章が答える。

「もう進路決めんといかんのやけど、まだ悩んで。親は好きなように言うて言うてくれるんやけど、やっぱり県外の大学かなと」

「私も、県外かな。島には何も無いから——」

ためらいがちに、呟くように言った。少子化が進む過疎地は、全国どこも同じだ。それが早いか遅いかの違いだけだ。

「さっき言ってたもう一人の子は？」

渚の問いかけに、思い出したように美海が答える。

「あつくんは、敦士っていうんやけど。私と同じ地区で、うちとは少し離れたところなんやけど、あ、渚さんが泊まっちゃった民宿の近くやわ」

「そういえば今朝、二人と同じ歳格好くらいの子を見かけたな」

「どんな感じの子やった？」

「スラッとして、お母さんほい人と一緒だった。犬の散歩してた」

「犬いうて、茶色の柴犬やなかった？」

「小さい、そうそう、柴犬だった」

「それロスやわ。あつくんやそれ」

「そんな感じの名前だった」

「あつくんやな」

「三人とも小さいときから一緒やから、もう十年以上一緒なんやけど。高校はなんとか入れたんやけど、あんまり来んようになって。気にはなっとなんやけど」

「理由は？」

二人顔を見合わせ、困ったように首を振る。そうなんだ、と相づちを打ち、遠くの海に目をやる。

「一つ、いいですか？」

美海が渚の意識を引き寄せる。

「渚さんは、なんでここに来たんですか？」

「ここっていうのは、産廃の見学ってこと？」

事件が表面化した当時は、多くの見学者が研修として来島していたという話を、前日に石川から聞いた。しかし、それも昔の話で、今来る大学生などの若者を中心とした観光客のほとんどは、産廃の見学には行かない。芸術祭の方だ。豊島事件そのものすら知らない。そのことを、美海も弘章も、肌で感じ取っていた。見学者が多かった頃は、興味本位といえども、この島に関心を寄せてくれているという共感性のようなものが感じられたが、今はそれが無い。物見遊山のように島にやってきては、好き勝手にあちこちに立ち入り、荒らしていく。

「なんか、覗き見されとるみたいで、嫌やな」

受け入れる側の島民として、言うてはいけなことを言ってしまった、といった罪悪感のような空気が、弘章から溢れ落ちた。

23/62 「今、私、大学で環境問題について勉強してるの。そこでSDGsのことについても勉強してて。SDGsって、分かる？」

「言葉だけやったら」

「『持続可能な開発目標』っていつて、国連が提唱してるんだけど。えーと、どこから言えばいいかな」

難しい話を避けるように言葉を選ぶ。

「ゴミの出しっぱなしっていうのは、私は無責任だと思って。私たち買った側には、買って使った側としての責任はあると思うの。だけど、作った側には作った側の、販売許可を出した側には販売許可を出した側の、売った側には売った側の責任があると思うのね」

「その話いうて、なんか豊島事件と似とるな」

「うん、そう思ってくれていい。でもね、最近になるまで、ううん、今でも買って使った側の責任になってる気がするの。つまり、作ったら作りっぱなし、許可を出したら出しっぱなし、売ったら売rippぱなしになってるように思うの。でもそれ

24/62 ないようなことはしない。責任のとれないようなことはしない。そして、もし悪いことをしたら――

「――謝る」

「そう！それ！今まで散々木を切って、山や森を荒らして、海を汚して、環境破壊をして二酸化炭素を大量に排出してきたんだから、まず謝らないと。そこをすっ飛ばして『私たちは地球環境に良いことをしています』なんて、耳障りのいいコマ―シャルで企業イメージを良くしようなんて、虫が良すぎるよ。私たち消費者を馬鹿にしてる」

「渚さんの言うことも分からんこともないけど、買って使ったのは私たちだから、私たちにやって責任はあると思うんやけど」

「うん、そう。私たちにももちろん責任はある。買った側として無責任な行動で、自然に無理な負担をかけちゃいけない。だからこれは、誰かの問題じゃなくて、私たちの、私の問題なんだと思うの。もういい加減、後にツケを回すことは止められないと、とんでもないことになると思う」

って、無責任ていうか、買った者だけに責任を押しつけてる気がするのね。それはやっぱり違うんじゃないかっていう気がして」

「分かる気はするけど、ずいぶんトリサイクルとかも進んできとる気がするんやけど」

「あまい！」

弘章の返答を一蹴したかと思うと、少しヒートアップした自分を自重するかのようになり、笑顔に戻して言った。

「それは言い過ぎか。ゴミ、ゴミ。でもね、今まで散々海洋汚染や自然破壊をして、二酸化炭素を排出して大量に作って、売って、そのために自然や人間まで壊してきているのに、テレビのコマ―シャルとかで、『木を植えてます』とか、『環境保護に努めています』とか、『CO₂削減に努めています』とかって、都合いいって思わない？その前にすべきことがあるでしょう、って私は思うの」

「すべきこというて？」

「あとのことを考えて行動する。それが考えられ、と顔を引き攀らせて笑った。

「とんでもないことって？」

「――人類が滅びる」

「そう言うて、弘章は少し大きめの声で、そんななおも渚は続ける。これは、人類が高い意識と自覚を持ち得るかどうかが試されている問題であって、もしそれができなければ、人類は間違いなく滅びると断言した。もしそうなれば、滅びるのは美海であり、弘章であり、二人につながる大切な人や愛する人、あなたたちの子どもたちまでが滅びる。その姿を想像しても変われないなら、それは人の顔をした悪魔だとも言った。そう言われても、自分が良ければ、とか、今が良ければ、と言うのなら、人類は確実に滅びる。その覚悟を今しないといけない。これは大量絶滅の始まりなんだと。

急に途方もなく高い壁が自分たちの前に立ち上がったように、二人とも夜の海に沈んでいくようなどんよりした気分になった。来なければ良かった、とすら感じていた。

なん」

「それで、この島に来た、いうことなん？」
「うん。ネットを見てるうちに豊島のことが出てきて。事件のことなんて全然知らなくて。それで、近くだし現地に来てみようって」

「お待ちせ致しました、と言って、店員がピザ二枚とバスタ二皿を運んできた。思いのほか大きなピザに三人は目を見開き、合わせた。これ、どうするの？と問いかける目が、同時に弘章に向けられると、当の本人は人差し指を自分に向け、固まった。

「石川さんの話聞いて、もう本当にビックリしたよ。やっぱりネットだけじゃ駄目だね。実際に現地に来てみないと。来て、見て、感じて分かることの方が、圧倒的に大きいよ」

「ふーん、そうなん」
渚がバスタを取り分けていると、すでに弘章の口はもぐもぐと忙しく動き、さらに両方の手にピザの切れ端が掴まれていた。

「ここは唐櫃の清水いうて、島の山からの湧き水

いよく流れ出る水を汲む。コップの表面につく水滴が涼しげで、冷たそうだ。喉がゴクリと鳴る。流し込む。滝のように、清流が喉に滑り落ちる。こんなに水って美味しかったっけ、と渚が驚く。

「おいしいやろ」
「おいっしー！何か不思議な気分。海が見渡せるこんな小さな島で、こんなに美味しい水が飲めるなんて」

笑顔で言う渚の向こうで弘章が、まるで自分の自慢であるかのように胸を張る。

「渚さん、いくでー！うおおおー！」
「わわわわー！うひゃー！」

三台の自転車が、坂道をまっすぐに下り落ちる。下り落ちる先は、はるか遠くの海。晴れ渡る青空の日の爽快感はこの上ない。そのまま海の彼方へ本当に放り出されていくかのようなスリリングな坂道も、この島の観光スポット。プレーキをかけずにどこまでいけるか。そんな好奇心と恐怖心の境界を感じられるのも、ネット上にはない現実世

渚の帰りの船までまだ時間があるというので、美海と弘章は渚を従えて、自転車で島の観光スポットの案内をはじめた。

「この小さな島で湧き水？」

「うん、島の真ん中に檀山いう山があって、それが標高三〇〇メートル以上あるんやけど」

「三〇〇メートル?!この小さな島で?」

「隣の小豆島やと、八〇〇メートル以上あるで」

「ひょえー」と、渚は突拍子もない声をあげてしまった。

たかだか周囲十二キロのこの島に三〇〇メートルの大きさは異様だ。そのうえ小豆島はさらに三倍近いという。スマホのマップを見ていては分かんかった瀬戸内の島々の世界に、渚は驚く。これならいかに瀬戸内の降水量が少ないといえども、水資源が枯れることもないわけだ。戦後すぐの疎開時には「四〇〇〇人もの人々が自給していた」と言っていた民宿植村の言葉も頷ける。

備えつけのコップを手に取り、切石の穴から勢

界だ。

美術館の外に敷き詰められた芝生の庭からの眺めで、下り落ちた坂道が幾重にも並んだ見事なばかりの柵田の真ん中を貫いていたことが見て取れる。いわゆる「映えスポット」。

美術館の建物に入る前、渚は二人に言われていた。

「変な美術館やで」

コンクリートでできたドーム状の玉子のような空間に、音はなかった。

しゃべってはいけない、音をたててはいけないのだ。

しかし、音がしているような気がする。

トクン、トクン、トクン

聞こえるような気がする。まるで記憶にはない、胎内に居るような感覚。何か飾りつけられているわけではない。ぼっかり空いた天井穴からのぞく、外界の空。

トクン、トクン、トクン

足元のコンクリートにあいたいくつもの小さな穴から、じわりと水が染み出す。染み出した水は溜まり、一筋の流れとなり、右へ左へとうねりながら低い方へと動き始める。まるで生き物のよう、と思った流れは他の流れと合流し、少し大きな生き物になる。それはまた別の流れと合流し、さらに大きな生き物となる。大きな生き物はうねうねと、一塊の大水たまりへと流れ込んでいく。

音のないその光景を、静かに目で追う。心が落ち着く、何も無い、不思議な空間。

島の最東端、王子が浜に辿り着く。緩やかに曲線を描く弓なりの白砂青松に、三人で座り込む。初夏を思わせる午後の日射しが静かな波に煌めき眩い。

「あの坂道ね、中学のときヒロとあつくんが馬鹿やから、どこまでブレーキかけずに曲がれるかいうてやって、本当にそのまま落ちて怪我して、馬鹿」

「あれはマジ死んだと思った」

「なんで、せーので止められたらいいんだけど、そういうわけにはいなくて。けど、そういうことなんだと思うの」

漠然とした表現が、レストランの話の続きだということに気づく。

「そやけど……、私なんかは何ができるかな。そもそもそんな資格があるやるか——」

「二人には、この島で生まれ育ったっていうアイデンティティがあるじゃない」

「ほんでも、俺らが何かしたわけじゃないし——」

「二人が直接何かしたわけじゃないけど、ちゃんと関心持ってるし、二人につながるおじいちゃんやおばあちゃんたちは頑張ってきたわけだし」

「それはそやけど——」

冷静に考えれば、すぐに同調できないのは当然だ。だからといって、すぐに引き下がってしまうことも躊躇われ、渚は続けた。

「ダークツーリズムって知ってる？」

「ダーツ？」

観光客の中にも、不慣れた電動自転車で事故を起こし救急搬送されるケースが後を絶たないという。二人のやりとりから感じられる距離感ゼロが、見ていてすがすがしい。

「なんかいいな、二人の関係」

「そうかなー、単なる幼なじみの腐れ縁やけど」それはどちらかというと、きょうだいや家族のような関係。思ったことがストレートに言えてしまえる関係。決して他人ではない。仮に否定的なことを言ったとしても、相手を全否定するわけではなく、そこに悪意はない。互いへのリスクペクトを失うことはない。だから関係性が壊れることはない。

「——あのね、私と、何か始めてみない？」

「何か、って？」

決意を込めた渚の言葉に、美海が怪訝な表情をする。

「とにかく今を変えないといけないと思うの。新しい今を作っていくかないと。自分が良ければいいとか、今が良ければいいとか、そういうのをみんな

「ダーツじゃなくて、ダーク」

弘章のポケに美海が、馬鹿、と突っ込み、場が和む。

「ダークっていう言葉のニュアンスはあんまり好きじゃないけど、ダークツーリズムって、人類の負の遺産を巡る旅のことなのね。瀬戸内であれば、ヒロシマの原爆ドームとか、ハンセン病療養所とかがあるんだけど、そこには、歴史に埋もれてしまわないように活動してる人たちがいて、そんな人たちとネットワーク作りながら、今を変えていけないかと思ってる。二人にも、そんな人たちと出会ってほしいの。じゃないと本当に、終わりの始まりになっちゃう気がするの」

「ほやけど、私ら、この先ずっとここにるかどうかわかんし——」

現実の問題だ。

「ううん、今すぐってわけじゃない。ゆっくりと、時間かけてやっていければ」

「ということは、この島で生きていくということやな」

「何して生きていくん？」

「漁師？」

美海の問いかけに弘章が返す。

「ヒロはそれでもええやろうけど」

「俺やって」

「観光だけやったら無理やで」

観光資源の真ん中で、それと同居生活をしているかのような環境に身を置いているからこそ分かる実感だ。

観光は世情に大きく左右される。それはまるで泡のような存在。膨れるときは想像以上に、膨れすぎるくらいに膨れ、島の住民としての生活が立ちゆかなくなることもある。それに、観光客が多く訪れたところで、直接収入を得られる島民は一部で、遍く島民が収入を得られるというわけではない。しかも、事故だの病気だのと問題が起きること多々ある。だが、島という特性上、公的な治安や医療はすぐに受けられないというリスクは常に残り、公的なマネージメントは十分とは言えない。

さえできれば可能性がないわけではない。いや、むしろこの島の遺産の継承を考えたとき、是が非でも協力者として求めたい。

なんとか——、と思う。

目の前の砂浜に打ち寄せては引くさざ波を、じっと見つめる。

一方で美海と弘章も混沌としていた。渚のいる手前、否定的な言葉も出しづらい。かといって、すぐに同意できるような話ではない。ただでさえ進路がはっきりと定まらず、悩みや不安を抱え込んでいたところへ舞い込んできた話だ。しかもこの島のこととなると、あまりにも大きすぎて、自分たちが手をつけていいものかと足が竦む思いになる。

気がつけば足元の砂に、小さな木の欠片で、訳の分からない絵を描いていた。

空に浮かぶ雲の白が、わずかに赤く色づきはじめていた。

「渚さんで、何か、ええ人やな」

また、天候や世情によっては、頼りにしていた観光資源に頼れなくなり、結果的に大打撃を受けることになる。つまり、泡のような存在なのである。それを美海のひと言が物語っていた。

「うん。それが、全国共通の、観光過疎地の問題なの。だからって観光や政治やお役所頼みにならずに、自分たちで自立して生きていけないかかって思うの。今の、これからの身の丈に合った、持続可能な水準で生きていくの。都会と同じような贅沢はできないかもしれないけど、都会にない贅沢ならできんじゃないかって」

「なんか、難しいな」

「分かんこともないけど——」

やはり高校生には無理なのか、と渚は口を噤んでしまった。まだ子ども気分が抜けないところに、次の進路に追い立てられ、周囲からの同調圧力もある中で自分の将来を描くことが難しいことは、数年前の自分をふり返ればすぐに思い至る。

ただ、動機づけはある。渚と同様、この二人にもはっきりとある。それにきちんと向き合うこと

渚の乗った高速艇を岸壁で見送りながら、弘章が小さく言う。美海が、うん、と小さく応える。

「ほんまにまた来るんかなあ」

弘章が不安を感じていたことが、美海に伝わる。来るという言うたやん！

美海はすでに信じ込んでいた。人の言うことをすぐに信じることは危険だということに気づく。

が、同時に、渚の発する言葉に嘘は感じられなかったとも思う。

「またLINEするんやって」

「えっ、なんでLINE知ってん？」

「ほやって、交換したもん」

「えーっ！いつの間に」

「ヒロがトイレに行っるとる間に」

「なんで？俺は？俺は？」

「さあね」

「俺にも教えてや」

言い合う二人に航跡を残しながら、高速艇は遠ざかっていく。

船内はやっばり観光客で満員だ。冷房が効いて涼しい。

船尾の窓から見える航跡の先に、美海と弘章が小さく見える。初めは手を振っていたが、今は何やら楽しそうに話しているように見える。

二人を自分の思いに引き込んでいいものか——
離れていく島をじっと見つめる。

たった二日の出来事が、ひどく大きなことのように思えた。旅をするたびに思い知らされる。今まで生きてきた世界の小ささと、新しく開けた世界の大きさ。その狭間で、自分の進むべき道はどこかといつも佇んでしまう。佇みながらも、やはり一步を踏み出すのは、人との出会いだと思わせられる。

島を西側に回り込みながら眺めていると、少しずつ姿を見せはじめた。昨日見た産廃事件現場。ここを舞台に、長年にわたり、壮絶な闘いが繰り広げられた。ときには裏切られ、ときには罵声を浴びせられた。子どもは理不尽な扱いを受け、年寄りには悔し涙を流した。島に関わるというだけで、

あるときは、ゼロウェイスト活動をしている町を訪れたこと。

あるときは、平和活動をしているカフェに行つたこと。

あるときは、アイヌ民族の自然と共生するニュースについて。

またあるときは、被差別部落の命や物を無駄にしない生活観について。

それらは、高校生の美海や弘章の日常にはなかったテーマだった。あったのかもしれないが、少なくとも意識下にはなかった。だから渚から送られてくるメッセージは、同級生とする話題とは明らかに異なり、常に新鮮に映った。

しかもそれらは、学校でたまに勉強する堅苦しい学習とは異なり軽快で、スッと入り込んでくるものだった。

環境や防災、平和、人権といったテーマは、それぞれ個別の問題ではなく、人類社会を持続させるために一体として捉えなければならぬのではないか。それぞれのテーマを融合させることによ

人としての尊厳を何度も何度も踏みにじられてきた。数多の涙が流された。命が奪われてきた。

こんなことがあっていいの——

やはり思う。なんとかしないと、なにかできないか、と。

南側に回り込み、島の全景が目に入る。緑に包まれた小高い山から覗く、いくつもの切り立った岩壁が、西洋の朽ちた城のようにも見える。

昔見たアニメ映画に出てくる、空に浮かぶ島のよう——

海に浮かんだ島はまるで、空に浮かぶ島がそのまま海に降りてきたように見えた。

石と水の豊かな島。滅びと再生。思いがけずそんなことを思った。

*

島を離れてからも、渚は頻繁に二人と連絡を取り合った。それは、熱心に誘うというよりも、いま何を学んでいるかといった内容や、気になるニュース、そして休みのたびに出会った人や、訪れた場所について伝えるものだった。

って、真の意味での価値観が見出せるのではないか。そしてそのネットワークを個人のものにするだけでなく、全体として一つに共有化し、広く一般化できないか。

美海と弘章にとって、途方もない構想を伝えるものもあった。しかし、そんな夢物語に腰が引けながらも、新しく開ける世界に魅せられていることも確かだ。何よりも、各地でそれぞれのアイデンティティを生かしながら、地道に、そして豊かに生きている人たちの存在に、希望の光を感じる。

一方で美海と弘章は、敦士との関わりを模索しはじめた。渚との話題に出たことが発端だ。それまでも気にはしていたが、その話題は敢えて避けてきた。しかし、高校卒業も視野に入り、この島を出ることが現実味を帯びてきた今、途絶えた関係をそのまましておくわけにもいかない。

かといって、学校でいる間に二人が話すことはなかった。不思議と学校でいる間は、意識しながらも距離を置き、不自然に振る舞うことが多い。

33/62 いつもの調子に戻るのには、帰りが同じフェリーになり、しばらくたってからが定番だった。

その日の帰りも、同じフェリーになった。まわりには近所の知り合いもいれば、他学年の後輩もいた。放課後補習が終わってからの帰りで、早い時間というわけではなかったが、部活を引退する前の遅い時間というわけでもなかった。甲板デッキの手すりに寄りかかり、低く垂れ込めた雲の隙間に覗く夕陽を眺めていた。

「なあ、あれからあっくんと連絡とった？」

「いや、とってない」

分かりきったことを訊いた気がした。

「何か訊いたりせんのか？」

弘章を責めるつもりはないが、ついそういう口調になる。

「……美海はどんなん」

「うん、……それは、私も分からん」

逆に切り替えされた美海も、そう答えるしかない。どんよりとした空の雲そのものだ。

「あいつLINEもやらんしな」

34/62 える。いま思い出しても、大切な思い出に違いない。

七月、学校が期末テストで半日のため、美海と弘章は申し合わせて敦士の家を訪ねることにした。美海と同じ地区とはいっても、そこは少し離れた場所にある。たまたまその時は雨も上がっていたが、いつ泣き出してもおかしくない、梅雨末期の空だった。

玄関の呼鈴を押す。しばらく待つが応答がない。昔と変わらないなど、目を合わせる。弘章が躊躇なく、ガチャリと玄関扉を開ける。

「敦士、おる？」

奥の方で物音がする。しばらくして敦士が姿を現す。

「おう、久しぶり。どしたん、急に」

「お前こそ何しょん」

互いに笑いかける。弘章の後ろに美海を見つけ、何かを察知したように付け加える。

「上がれや」

努めて明るく言う弘章に、美海が提案を持ち出す。

「今度、家に行ってみる？」

「家か……」

数年前に思いを馳せる。いま以上に男女を意識しなかった時代。まだみんな子どもだった頃。他学年の友達もいたが、なぜか三人で過ごすことが多かった。組み合わせが良かったのだろう。お調子者でいつもふざけてばかりの弘章、男勝りで正義感が強い仕切り役の美海、おとなしい割にしっかり者でどこかクールな敦士。キャラがまったく違っていても関わらず、なぜか気は合っていたし、何かするときはいつも一緒にいた。キャラが違うことが幸いしたのかもしれない。

「家に行くんやこ中学の時以来やなあ」

「ようしたもんな、ゲーム」

「あの時はよう集まってしたな」

胸の奥にあたたかい灯がともる。砂浜で遊んだこと、山を駆け登ったこと、夏祭りや学校の帰り道、それぞれのなかに、それぞれの場面がよみが

失礼します、と誰にもなく言いながら、こどもまりした敦士の部屋に上がり込んだ。

「部屋、昔と変わっとらんか」

「そこら辺に適当に座って」

何か飲む？と言い、弘章が、持ってるからいい、と答える。

ゲームでもする？と言い、美海が、いい、と答える。

「あっくん、学校どうするん？」

「ああ、うん……」

痛いところを直球で突く。

勉強机のいすに座る向こう側の本棚には、教科書やら参考書が整然と並んでいる。そんざいに扱われていないことがよく分かる。そのうえ、学校では使われないような科学雑誌や専門書のようなものまでがあり、昔と変わらないな、と美海は思う。

小学生のときから敦士は、虫やら気象やら天体やらに、やたらと興味を示していた。そのことが気にかかると、美海も弘章もそっこので、独りでも立ち止まって観察し、考え込んでいた。そん

な頃を思い出し、美海は少し嬉しい気持ちになった。見上げた敦士の向こう側の壁に、天体などのポスターが目映る。

「あっくん、卒業したらどうするん？」

「いや、別に」

「別にいうて……」

沈黙が、少し流れる。

「俺はな、県外の大学に行こうと思とる」

「私もなんやけど」

弘章に続けて美海が言った言葉に敦士が応えた。

「で、どうするん？」

「どうするんて……先のことやん、まだ分からんわ」

ばつが悪そうに答える弘章に、敦士が失笑する。

それは、先のことまで考えずに進路を考えていることに対する嘲りのような冷やややかな笑いだった。

「私はな、大学行って、環境のこと勉強しようと思う」

この数ヶ月受けてきた渚の影響だ。

「ふーん、なんで？」

食いついた敦士に美海が、渚から聞きかじったことを話しはじめる。

「あっくん、SDGsいうて知っとる？」

「うん、まあ」

「今な、地球は大変なことになっとるん。二酸化炭素が増えて地球温暖化で異常気象が起きて、自然災害もすごいやろ。それに、私らが出すプラスチックゴミや自然破壊で他の種が絶滅しかけて、生態系のバランスも壊れとって。このままじゃ人類自体がもたんでいうか、死滅するかもしれんやん。そやから今までみたいな大量生産、大量廃棄やったり、エネルギーの無駄遣いやなくて、今の生態系が持続できるような生活スタイルに変わっていかんといかんの」

「へえー、美海、よう知っとるやん」

感心しながらも、やはり少しだけ冷たく笑った。

「みんな渚さんの受け売りやけど」

「渚？」

「あー、知り合いの大学生」

「ふーん」

敦士にも思うところがあるようで、何か言いたげな雰囲気は二人に伝わる。敦士の言葉を待つ。

「環境問題やん、馬鹿げとるわ」

「えっ」

唐突な否定の言葉に、その真意を知りたくて敦士の目を見つめる。

「環境問題みたいな小さいことで。この国も、この星も、いつか消えていくんやで、分かっとる？」

この家も、この島も、全部なしなるんやで」

「あっくん、何言いいよん」

それは美海には聞きたくない言葉で、まるで今の自分が全否定されているように思えた。

「そもそも、人類は絶対に滅びるんや。いやその前に、この地球自体、四十億年もしたら表面温度が上がって溶けて、地球上の生命はみーんな絶滅するんや。七十五億年もしたら太陽は赤色巨星になって、今の地球軌道を超えるくらい膨張して、地球は太陽に飲み込まれて、消えてなしなる。

知っとん？この五億年の間にも地球は大規模な大量絶滅を五回も繰り返し替えしてるんやで。一番最

近の五回目の大量絶滅は六六〇〇万年前。巨大隕石の衝突が原因いうて言われとるけど、ほかにも地球規模の火山噴火や、スノーボールアイスっていう地球全体が凍結したこともあったんや。

どっちみち、俺らの祖先、ホモサピエンスが二〇万年前に誕生したと考えたら、それは何百倍も何千倍も昔の出来事なんや。そう考えてみたら、地球が滅びるより前に、人類が滅んだって、全然おかしくないやん。いや、そう考える方が自然。人類が存在した歴史やん、地球の歴史から見たら、ほんまにちっちゃいことやないか。そんなかで人間が起こす環境問題やん、問題にならんやろ」

一気に畳みかけるように話し、沈黙が訪れる。共感すればいいのか、反論すればいいのか、二人は返す言葉を見つけれずにいた。

「そんなことをこの宇宙は繰り返してきたんや。そしていつかは、この宇宙やって収縮が始まって、無に還っていく。俺ら人間が生き延びて残らんし、痕跡も残らん。ましてや生き延びることや不可能やし、そうしようとするに何の意味

があるん。馬鹿げとるわ」

自分ではじめた喧嘩を自分で収めるかのように、結論づけた。

この虚無感が、敦士が学び、考えてきた科学の結論かと思うと、学校に来なくなった意味も少し飲み込んだ気がした。

しかし、それを認めることは、これから自分がしようとしていることを否定することになる。描きかけていた自分の将来が、音を立てて崩れていく気がする。それは何としても阻止しなかった。

沈黙のあと、美海は言った。

「そやから言うて、何をしてもええということにはならんやろ？」

「美海が言よることやこ、全部、人間のエゴやろ。人間が生きたいように、好きなように生きてきた、エゴ。けど、いざそれが難しくなってきたから言うて、ちょっとでも生き延びられるようにライフスタイルを変えることやって、それも人間のエゴ。みんな無駄なことやわ」

「そんなこと言うたら、」

海は虚を突かれる。

「……澤村雄一は、俺のおじいちゃんや」

「えっ?!」

敦士が刺すようにまっすぐ見つめる目を、茫然と美海は受けとめる。

「——何？あっくん、何言よん？」

「中学のとき、豊島事件の研修で資料館に行ったとき、美海言うたやん。これ、私のおじいちゃんやて。でも、澤村雄一は、俺のおじいちゃんなんや」

美海が、「これね、私のおじいちゃん」と、黒いリボンがついた名前を指さす。刹那、敦士は目を見張り、美海を見つめた。目が合った美海は軽く笑ったあと、その名前を見あげて言った。

「おじいちゃんもこの島を守るために頑張ったんやて」

敦士はゆっくりとその視線を移し、美海の祖父だという名前を見つめた。

中学三年生の秋のことだ。

この島の記憶——

子や孫を想い、生活も、財産も、命までも注いでこの島の再生を願い、闘ってきた先人を否定することは、許せなかった。

「そんなこと言うたら、おじいちゃんらが頑張ってきたことも無駄なこと言うん？」

「おじいちゃんて——」

「おじいちゃんらが命懸けで闘こうてきたこの島のこと、覚えとるよな？勉強したよな？忘れてないよな？私らは直接は知らんけど、実際には何もしてないんやから。でも、私らは聞いたやん。見たやん。それも無駄やっというて言うん？そんなこと言うんなら、私は許さんから、あっくんのこと、許さんから」

「許さんて——」

そう言うて不敵な笑みを浮かべたあと、敦士の表情がみるみるうちにこわばっていく。そして、押し殺すようにぼそりと告げた。

「美海のおじいちゃん、澤村雄一は……」

敦士の口から突然出てきたその名前に、美

「えっ、それなに？」

「敦士、どういことなんや」

「知らんわ、そんなん。俺、昔、小さいとき、母さんから聞いたんや。資料館で。これはお前のおじいさんやて。この島を、お前たちを守るために、立派に闘って亡くなったんやて」

「だって、そんな……。お父さんにきょうだいなんて……おらんかった。それでおじいさんが同じやて……」

美海の思考が混乱し、方向性を失い飛んでいく。「ほやから俺、中学のとき美海が言うたあと、なんでやろうって、ずっと考えとって……」

「お母さんに訊いたんか」

「訊けるわけないやろ、そんなん」

もし訊いて、何か不都合なことが明らかになるようなことがあれば……。そう思うと、訊くに訊けない気持ちも分らないでもない。

「なあ、あっくんのお父さんの名前は何ていうん？」

「あ、それや、それ」

「うちの父さんの名前は康二」

「……それが、俺、父さんのこと、何も知らんや」

「何も知らんて、名前ぐらい……。写真とか」

「それが、何も聞かされてないんや。俺が赤ちゃんのときに死んだいうだけで。記憶にもないし、何もない」

そう言うと、部屋中を探すように見渡した。美海と弘章も、そういえば、と思い返して部屋の中を眺め直してあらためてそのことに気づく。

「うちの父さんもや。私が赤ちゃんのときに亡くなっとる」

「それいうて……」

家族構成は互いに分かり合っていた。幼いときから長い時間、きょうだいのように過ごしてきたから、それはあまりにも自然な事実だ。しかし事実と理由は異なる。理由までに関心を寄せられてはいなかった。

手がかりを見つけられず、黙り込む。部屋の空

かの間違いであってほしいと願う。

窓の外の雨が、強さを増していた。

*

「雨、激しいなってきたねえ」

美海に向けてのものか、祖母節子に向けてのものか、母が誰にともなく言う。

夕食時のニュースに続いて流れる天気予報で、今後の天気の見通しについて解説がされる。いつもの天気予報士が、いつもとは違って少し緊迫した様子で伝える。今夜がヤマだという。

「一年を通して温暖で降水量が少ない」というのが、瀬戸内の気候とされてきた。しかしこの数年、瀬戸内のどの県でも大きな豪雨災害が起きている。数年前の隣県の豪雨災害は特に酷かった。もうすでに、「降水量が少ない」は、撤回しても良いのではないかと思えてくる。これも地球温暖化の影響なんだ、と思う。もうこれ以上この星を、この島を傷つけないで、と思う。

家に帰る間も、家に帰ってからも、美海は逡巡していた。傷ついた自分に決着をつけるために、

気が沈み込む。

もし本当に敦士の祖父と美海の祖父が同一人物で、美海の父親にきょうだいがいないとなれば、美海と敦士は異母きょうだいということになる。口には出さないが、みんなが同じことを思っていた。しかしそれを口にするには躊躇われた。安易に口にしていいことではない。

「——なあ、もしかしてあっくん、それで学校に来んようになったん」

美海の言葉に、弘章は初めて気づく。

「——」

敦士の無言が、すべてを物語る。
弘章が言う。しばらくして、美海も言う。

「——言うてほしかったわ」

聞かされる美海の気持ちを考えてと言えなかった。しかし、美海の気持ちも分かる。

そんなこと言えるかよ、と言おうとして止めた。代わりに、ごめん、と敦士は小さく言った。

まだすべてが明らかにならなかったわけではない。何

訊くべきか、どうか。知らないままがいいのか。

いったい父はどういう人物だったのか。これまで母・雪乃から聞かされてきた父親像に悪い印象はなかった。むしろ、良い父親像だ。しかし、自分の知らないところで、それを覆すようなことをしていたとすれば。それを母も祖母も知っているとは限らない。とすれば、母や祖母を傷つけ、苦しめることになる。

言うべきか、どうか。

それでも、感情が抑え切れない。

「母さん、今日、ヒロとあっくんのところに行ってきた」

探りを入れるだけのひと言のつもりで言ってみた。しかし同時に、夕食の片づけをする雪乃の動きが不自然に止まったような気がした。

「ああ、敦士くん。最近は学校に行けとん？」

「あっくんがな、あっくんのおじいちゃんは、澤村雄一やうて言うん。うちのおじいちゃんと一緒にやうて言うんやわ」

洗い物をする手はぎこちなく動き始めるが、母

からの応答はない。やっぱり私の知らない何かを知っている、そう感じた。

「そんなわけないわな。同名同名なんやろ。こんな小さい島でも、そんなことあるんやな」

ぎこちなく笑いかけながら、自分を誤魔化すように食べ終わった食器を運ぶ。雪乃の明確な答えがほしかった。

「死んだ父さんはきょうだいなんかおらんいうて言よったから、もしそうやったら、私とあっくんはお母さんの違うきょうだいってことになるもんな」

口にしたくない言葉が流れ出す。早く止めてほしかった。早く答えてほしかった。そうじゃないって、言っただけじゃなかった。

「お父さん、ええ人やったんやもんな。そんなことあるわけないわな」

今にも泣き出しそうになりながら、どうして答えてくれないの、早く何か答えて、と心が叫ぶ。

「おばあちゃん」

ひととき強く発した雪乃のひと言に、美海は息

を呑む。

「おばあちゃんと話してみ」

蛇口から流れ出る水を見つめたまま、ゆっくりと、論すように母が言う。

母の背中を見つめる目が涙で滲んでいく。すぐにも雪乃の背中に頭を押しつけたかった。その背中にすがりついて泣き出したかった。違うよ、と言って抱きしめてほしかった。

両手を握りしめ、奥歯を噛みしめる。次の声が出せない。今まで信じきって見てきた周りの大人たちが、どす黒く滲んで見えた。

逃げ出すように、居間にいる祖母に駆け寄る。

できるだけ平静を装い、つくり笑顔で話しかける。

「なあ、おばあちゃん」

「ん？どした？」

やっこの思いで声を絞り出す。

「おじいちゃんと、お父さんのことなんやけど」
言ったとたん、美海は、節子の表情がこわばったように見えた。やっぱりおばあちゃんも何か知っていると感ずる。

「……今日あっくんが、同級生の小野寺敦士くんが、おじいちゃんが澤村雄一やって。おじいちゃんが私と同じ澤村雄一やって言うたん」

「——」

「島に同名同名の人がおったん？」
節子は答えない。テレビ画面を見つめる目は焦点が合っていない。

「お父さんはひとりっ子やったんやろ。もしおじいちゃんが同じやったら、あっくと私はきょうだいやんか」

「そうやない」

刹那、節子はきっぱりと答え、美海を見つめた。
「そうやないんや、美海」

「ほんならなんであっくん、あんなこと言うたん？あんな嘘ついたん？」

つくり笑顔が、笑顔でなくなってしまう。

「それは……」

「なんで？おかしいやん、おばあちゃん」

悔しくて、悲しくて、涙が抑えきれない。

沈黙の時間が流れる。騒々しく雨音が叩きつけ

る。テレビの音が寂しく部屋に響く。

後ずさりし、節子とも雪乃とも間合いを開け、

美海が佇む。感情が溢れ出す。

「なんで？どうして？どういうこと？……何か言うて。なあ、お母さん！おばあちゃん！

みんな、みんな勝手なことばーで。子どものことやん、私の気持ちやん、何にも考えたらんやん」

そう言い放ったかと思うと、美海は部屋を飛び出した。

「美海！」

雪乃の制止を聞くことなく、その気配は玄関から消えていった。

雨が強く降りつける暗闇へと消えていった。

後を追いつ、豪雨の夜に雪乃と節子が飛び出す。

「おばあちゃんは家におって。どっかから電話があったら連絡して！」

そう言い残された節子は雨に打たれながら、茫然と立ち尽くした。

もし美海に何かあったら——
 一度ならず二度までも——
 そう思うと、いても立ってもいられなくなる。
 が、今はどうすることもできない。これまで生きてきた人生をふり返っては、悔いることしか思い浮かばない。今までの罰が当たったのね、と自分を責めるしかない。

雪乃は強い雨に打たれながら、辺りを小走りに探す。降った雨が道路を川のように流れていく。人の気配はどこにもない。

「美海！美海！」

出す声は雨音でかき消され、どこにも届かない。あの日もこんな、時化した日だったことを思い出す。もし、美海に何かあったら、よりによってどうしてこんな日に、余計なことばかりが頭をよぎる。いつも見る小さな川が濁流となっっていることが、音だけで分かる。明かりはない。探そうにも探しようがない。だが、探さずにいられるわけもない。雨を避けられる場所を考える。港の待合所、い

くつもある空き家の軒下。

「美海！美海！」

少し先の学校まで行ったのだろうか。それとも人気のなくなった教会か。公民館に明かりを見つめる。避難所として開設されているのだろう。

「すみません、うちの美海来とらんかな」

知り合いの消防団の若者の顔が見える。

「どしたん？」

「美海が家を飛び出してしもうて」

「美海ちゃんが？この雨の中にかいな」

申し訳なく返事をする、分かりました、と言って、仲間の団員に連絡してくれた。

しばらくして、どこかから低く重い地鳴りが腹に響く。

「あら、こりゃーどっかで地滑りが起きたな」

タイミングの悪いときに起きたものだと思いがら、若者は雪乃に、公民館で待機しててください、と告げて外へ飛び出る。

「私も行くわ」

「危ないから、二次災害になったらいかんから、

ここにおいて」

無理矢理制止させられ、仕方なく雪乃はしぶ濡れのまま座り込む。

慌ただしく人が出入りする。近所の知り合いもいれば、顔見知りの団員も駆けつけてきた。

「地滑りの方は大丈夫やって」

防災無線から連絡が入り、ホッとするが、美海の安否が確認されたわけではない。一度立ち上がった体を、またいすに下ろす。

気が気ではない。

父親のことをもっと早くに言っておけばよかった、と思う。だがそれは、自分の口から言うことはずっと憚られた。自分が言うことではないと思いつけてきた。しかし、美海の気持ちになれば、誰から告げられることも同じではないか。むしろ、母である自分が言っておけるべきではなかったか、と後悔をする。後悔が本当の後悔になってしまわないか、それだけは、と強く深く念じる。

突然、手にしていたスマホが鳴る。明るく照らすスマホの画面に、「自宅」の文字が浮かぶ。おは

あちゃんから、と通話ボタンに触れる。

「もしもし——」

*

翌朝、前日までの梅雨空が嘘のように青空が晴れわたる。ようやくの梅雨明けだ。風もなく、海も凪いでいた。

前夜の豪雨は各地に崖崩れなどの被害を及ぼしたが、人的な被害は免れた。

美海が見つかったのは、家を飛び出して数時間後だった。家に電話が入ったことで無事が確認された。電話の相手は、敦士の母、佳代。豪雨の中、美海が向かった先は敦士の家だった。驚いた敦士と佳代は家に入れ、着替えさせ、落ち着かせた。敦士には思うところがあつたが、それは佳代には言わなかった。大雨のなか帰すのも危険だったし、明らかに様子がおかしかったため、佳代がそのまま留め置いた。そしてそのことを美海の家で電話で伝えたのだ。

「おはようございます。この度はすみませんでし

た。ご迷惑をかけてしもうて」

45/62
そう言つて、雪乃と節子は、敦士の家の玄関に立つ。どうぞ、と気まずく佳代が居間に案内する。そこには、弘章と渚もいた。

渚は前の夜、弘章からの連絡を受け、朝一番の船でそっちに行くから、と急遽駆けつけていたのだ。

「はじめまして。私、立花渚といいます。」

初対面となる渚は、すっと立ち上がりあいさつをするものの、面識のない雪乃と節子にとっては、特に関心を寄せる対象ではなかった。

「五月にこちらに研修で来たとき、美海ちゃんと弘章くん会って、それ以来いろいろとお世話になっていました。昨日の夜、弘章くんから連絡があつて、心配になつて、朝一番の船で来ました」

「ごめんなさいね、遠いところ」

渚の隣で弘章が恐縮しつつも、釈然としない表情で座っていた。前日、敦士から聞かされた「澤村雄一」の件が引っかかったままであり、その真意がはっきりするまでは、二人も自分も納得でき

るはずがなかったからだ。

「美海ちゃん、昨日の夜、泣きもって家に来て。詳しいことは分らんけど、とにかく無事で良かったわ」

敦士の母が言ったか言わずかで、美海を引き連れて敦士が隣の部屋から入ってきた。佳代の隣に敦士が座る。その隣に美海と弘章、そして渚が座る。美海の正面に雪乃と節子が座り、全員が揃つた。

敦士も美海も、ばつが悪そうな表情だ。しかし渚の姿を見つけた美海は、さすがに申し訳なさそうに軽く会釈をした。

「あ、やっぱり敦士くんだ」

渚が声を発した。

「五月に来たとき、その港で会つたよね。朝早くに」

みんなが渚に注目したあと、敦士に視線を寄せ

る。「霧の深い日」

ああ、あの日、と言う敦士と渚を見比べながら、

46/62
思い出したように敦士の母もハツとして、あのときの、と呟く。

「敦士くん？健一によう似とる」

節子の言葉に、「健一？それ誰？」と敦士が怪訝な表情を浮かべる。隣にいた佳代から声がかかる。

「敦士のお父さんや」

えっ、と思つたのは敦士だけではなかった。美海も、弘章も同じだった。

「あっくんの父さんいうて、私の父さんじゃないん？」

呟くように美海が言う。

「昨日はごめんなさいね、美海が」

父親の話にふれて切り出した節子の言葉に、その場に居るみんなが、あとに続く決意を待った。

「いつかは言わんといかんと思つたけど。敦士くんにも、美海にも。佳代さん、ごめんなさいね」

いいえ、と応じる敦士の母、佳代に、自分たちの知り得ない祖母との関係を、敦士も美海も、弘章も感じ取る。

「これは本当は、私とおじいさんが始末せんといかんことやつたんや。そやから敦士くんは、お母さんのこと、悪く思わんとつてな。佳代さんも本当にこの通り、今の今までごめんなさい」

そう言つて、深々とぬかずいた。いいえもうそれは、と佳代も応じる。

「美海にも今まで黙つていて、ごめんなさい。お母さんにも苦しい思いをずっとさせてしもうた。雪乃さん、ごめんなさい」

隣に座る雪乃にもぬかずく。節子の一方的な謝罪に、場の空気が落ち着く。

「さて、どっから話したらええんか。敦士くん、美海、二人はね、いとこになるん」

えっ、とまなざしを見開き、二人して視線を交わす。

「けどお父さんはひとりっ子や……」

「美海、本当はお父さんにはお兄さんがおつたんや。それが、敦士くんのお父さん」

「あっくんと私は、いとこ——」

「そう、二人はいとこになるし、敦士くんは、私

の孫になるん」

驚いたように、敦士は祖母を見つめる。それまでの厳しかったまなざしが、少し和らぐ。

「あのポスターや本は、敦士くんの」

はい、と素直に頷く敦士の返事を聞きながら、部屋に貼られたポスターや、本棚に並べられた書籍を見渡す。

「お父さんもな、理科が好きな、本当に優秀な子やった。そやから高校を卒業したら、県外の大学に行きたかったんや。そやけどその頃おじさんは島の運動に手とられて仕事が思うようにならんようになって。お父さんには高校を卒業したら、漁師を、家を継いでほしかったんや。それで大喧嘩になって。その頃、佳代さんとおつきあいしとったんよね」

確かめるように視線を移すと、恐縮したように佳代も会釈をする。

「おじいさんいうたら、それも大反対で。それならもう縁を切る、勘当やーいうてな。家を飛び出して。それで佳代さんと、お母さんと一緒になっ

んで。ほんで結局二人とも——」

「私は遭難したという話だけで——」

母から聞かされていた美海の記憶に間違いはなかった。ただその話には、自分の知らないストーリーがあった。

なぜ、どうして——、という思いが、激しく渦を巻く。

「それからはおじいさん、お父さんたちの話は一切せんようになってな。きょうだいやおらんことにしとったから、余計に。」

そやけど、二人は本当に仲のええきょうだいやったんやで。康二はいつも健一にひつついて。何するんも一緒に。健一も面倒見のええ兄さんやった。康二が産まれたときやこ、ほったを突っついて。そのたびに康二は嬉しそうに笑うて。健一もそれを嬉しそうにじっと眺めて。

大きかったら、おじいさんも運動の合間に二人を船に乗せて漁に出とったわ。

そやから健一があんなふうにな家を出ていたあとは康二、本当につらそうやった。かわいそうなこ

たん。そやけどな、そんな調子で出て行てしようたもんやから、あとで子どもができた人から聞かされても、私も何にもしてやれんで……。ほんまにごめんなさい」

あらためて詫びる節子の寂しげな笑顔に、場の空気が沈む。

「ほんで結局、家には弟の、美海のお父さんの康二だけが残って。おじいさんは、お父さんが高校卒業したら、自分の後を継がせて漁師にしたんや。それから、お母さんと一緒になって、美海が産まれたん」

美海には知らないことばかりだった。そんな大事なことを、という思いもあった。が、そうならざるを得なかった状況も分からなくもない。それだけこの島が、家族が追い詰められていたということか、と察するが、それでも釈然としない。

「二人が産まれてすぐのことやった。風の強い時化した日に、漁師仲間から、兄さんの、健一の船が遭難したいうて連絡が入って、康二があわてて飛び出してしても。みんなで止めたんやけど、きか

とをしてしもた」

我が子でありながら、思うように人生を描くことができなかった、息子二人の幼き思い出だけが、節子にとって唯一の慰めだった。

なら、どうして——、と美海の拳に力がこもる。どうして、どうして——、と思うたびに、美海の目に涙が滲む。

それなら反対しなきゃよかったんじゃない——、と奥歯に力が入る。

「おじいさん、亡くなる前に、あっちに行ってもあいつら会うてくれるかなあいうて。みんなにすまんことしたいうて、何度も、何度も。私にも、すまなんだ、すまなんだいうて、泣きながら息を引き取っていったわ」

「それやったら——」

一つ大きく、美海が口にする。

「それやったら、初めから反対やん——」

悔しさが滲む。敦士ときょうだいでなかったことに安堵はした。しかし、もし、父に兄がいたことを知っていれば。もし、敦士がいとこだと分か

っていれば――

「美海、敦士くん、ごめんさい」と、涙声の節子が深々と頭を下げる。その義母をかばうように、雪乃が節子の背中に手をのせる。佳代も、どうか顔を上げてください、と声をかける。正面で座る母、雪乃。佳代の姿。そして敦士を見る。

母はどんな思いで生きてきたんだろう。

あっくんのお母さんは、どんな思いで生きてきたんだろう。

あっくんは今、どんな思いでいるんだろう。

そんなときだった。

「――母さんが、どんな思いで生きてきたんか、分かるか。俺らがどんな思いで生きてきたんか、あんたに分かるんか」

敦士の鋭い口調に場が凍りつく。同じ思いを抱いていたことを理解した美海は、自分の言葉を飲み込んだ。

「あっくん、あっくんだけやないわ。うちの母さんやって同じやで。それに、おばあちゃんやって。みんな、何も思わんと生きてきたわけやない。私

あさんがその人で、調べていくうちに本人だっということが分かって。そんなことお父さんも知らなくて。おじいちゃんが何も言っていなかったから。けどおじいちゃん、言えなかったんだと思うの。覚悟して行ったお姉さんのためにも、私たちが差別を受けないためにも。だからずっと、自分一人を抱え込んで。何十年も。

そのことを知ってからいろんなことに関心を持つようになって。差別のこととか、政治のこと。大島だけじゃなくて、岡山のハンセン病療養所のこと。アイヌや部落差別や在日のこと。ヒロシマやゼロウェイストや、それに、豊島のこと。

これはね、大叔母やおじいちゃんが、私にくれた宿題じゃないかって思ってる」

美海ちゃん、と呼ばれると、美海はうつむいていた顔を上げ、渚と視線を合わせた。

「私も実は、大叔母のこと知ったとき、びっくりして、ショックで、家を飛び出したの。

――みんな、何も思わずに生きてきたわけじゃないんだと思う」

やって――」

美海の、言葉にならない涙が、頑なな敦士に迫る。弘章や渚の胸にも広がる。どんな言葉も、今の二人の心を癒やすものにはならない。中途半端な言葉は誤魔化しにしかならない。

渚が口を開く。

「私ね、みんなに話してなかったことがあるの。この島に来た理由とか、大学でしてることとか、嘘じゃないんだけど、本当はもっと別な理由があった」

一つ大きく深呼吸をして、テーブルを見つめたまま続ける。

「私の大叔母、おじいちゃんのお姉さんはね、実は、大島にいるの」

その一言に、その場にいたすべてが渚の意図を悟る。

「うん、大島青松園。国立ハンセン病療養所。元ハンセン病患者。

私ね、全然知らなかったの。高校生になるまで。高校のとき研修で行って、たまたま出会ったおば

少し微笑む渚を、美海は言葉を返すことなく見つめた。

敦士が噛みついてきた。

「形あるもんはみな、いつか壊れて、消えて、なくなるんや」

前日した話の続きを聞いているようだ、美海も弘章も敦士に視線を寄せる。

「四〇億年もしたら、地球上のすべての生き物は死滅するし、それまでやって、いつ隕石の衝突や、地軸の変化、気候変動で生き物が死滅するから。人類が誕生して二〇万年。たった二〇万年やで。アフリカ大陸からここまで辿り着いたのなんて、たったの四万年前やわ。この五億年の間や、何回大量絶滅があったと思う？五億年いうて、四万年の一万倍以上やで。本当に小さいことや。差別も戦争もゴミも、ほんまに小さいことなんや。あんたの言ることやん、全部――

全部意味がないんや」

睨めるように敦士が渚を射る。

「敦士！」

突然部屋に入ってきたその怒鳴り声に、全員の視線が集まる。敦士の放った言葉に反応したのは、渚の知る人物だった。

「おじさん！」

みんなが旧知のごとく、口々に声をあげた。民宿のおじさん、植村だった。

「敦士、もういっぺん言うてみ。お前、みんなの言うところが分からんのか！分からんのか！分かんたら、そんなんやったら、もうわしの船にやこ乗らんでええわ！」

「えっ、あっくん、植村のおじさんの船に乗っとん？」

敦士の母以外は、それで初めて察した。

「こいつが船に乗りたいうからよ、漁師の見習いになるんやったら思て乗せてやっとなや。」

敦士な、お前の言よることは屁理屈じゃわ。意味のないことやこ、この世の中に一つもないぞ。せーんぶのことに意味があるんや。壊れようが、消えてなくなるうが、みんな意味があるんや。お前が言よるみたいにな、形のあるもんは囚われと

出されて。ほしたら観客が、『ゴミの上を通学してゐるのか』いうて馬鹿にされて。わしらがいったい何したいうんや。子どもに何の罪があるんや。そんなんで、若いもんも子どもも島に誇りなんて持てんわ。

ほやから、わしらは、わしらの代で壊したまま残したらあかん。これはわしらの責任なんやいうて、なにもかも犠牲にしてやってきたんや。節子さんやって、雪乃さんやって、佳代さんやって、いろんなもん背負てやってきたんや。それが何や、意味が無いいうんわ、ほんまに情けないわ」

怒りではない、哀しみ。それは、植村だけのものではない。節子も、雪乃も、佳代も、あの時代を生きた者すべてが受けた哀しみだった。廃棄物がすべて撤去されたからといって、すべてが元通りになるわけではなかった。失ったものが還ってくるわけではなかった。それでも、自分たちの時代で起こしてしまったことにケリをつけるために、あらゆるものを犠牲に生きてきた。切り裂かれた傷口は、未だ癒えてはいなかった。

「あんな大事なことがなんちゃ見えんようになっちゃあうぞ！」

植村の迫力ある声に、みんな圧倒された。その姿に、当時の運動の影が見えた気がした。そして思い出すように、植村が言葉を紡いでいく。

「雄一とはな、わしはずっと一緒に運動しとった。あいつなりに苦しんどったことも、よー知っとる。あいつが元気なとき、わしらは合言葉みたいによう言うた。この海を、この島を綺麗にして子や孫に残さなあかん言うてな！」

部屋に入ってすぐ傍にいた節子が、植村さんと両手を差し出して、落ち着かせる。それを片手で応じて、大丈夫だ、と制止した。植村が続ける。

「昔、まだ今みたいに産廃が撤去されたらんかったとき、近所のばあさんが、街に行った息子に島の野菜を送ったらな、『こんなもん二度と送ってくるな』いうた言われてな。泣いとったわ、ばあさん。」

島の中学生は修学旅行でな、野球観戦にドームに行たら、香川県豊島中学校ってモニターに映し出されて、落着きを取り戻した植村は、我が身をふり返りながら、そして抜け殻のように言った。

「敦士、お前の言うように、意味のないことかもしれないな。元に戻すことも、今までのことも」

自虐的な言葉のなかに、あとに残される者の寂しさが滲む。この年寄りを残していくのはいったい誰か。

「おじさん、そんなことないよ」

渚が恐る恐る応える。

「敦士くんの言うことも、確かにそうだけど、おじさんたちがしてきたことは意味のないことなんかじゃないよ。人を変えて、世の中を変えてきたじゃない。まだ十分じゃないこともあるかもしれない。けど、今につながる教訓を、いっぱいつくってきたと思う。」

私なんかには分からないけど、苦しい思いをしなくてもここまで辿り着けたのは、おじさんたちのおかげだよ。絶対に意味のないことなんかじゃないよ」

一人にしてはいけない。これ以上この人を一人にしてはいけない。

「——そうか、意味がないことはないか。そうか、ありがとうな、渚ちゃん」

立ち尽くす植村は肩をふるわせ、押し殺すように嗚咽する。

「——ごめん、なさい」

敦士の言葉が想いとなり、部屋の真ん中に小さく灯る。

*

水平線に小さな雲が、横一列に並ぶ。大学の前期試験が終わった八月の夏空。およそ一ヶ月ぶりに豊島への高速艇に渚は乗り込む。夏休みということもあってか、島に向かう船は観光客で賑わっていた。強い日射しに照らされ、瀬戸内の海はキラキラと輝く。

ゴモゴと援護する。

「それぞれの命と、それぞれの幸せを大事にできたら、エゴでもええんちゃうん。どうせみんなエゴなんやし」

弘章が両手に持つピザの一方を口に放り込む。

「ヒロ、ちょっと待てや。エゴでええなんて言うたら、何でもありやん」

「ごくりと飲み込み、弘章が続ける。

「何でもありちゃうわ。まず自分も人も、命は大事。オッケー？」

胡散臭く思いながら、美海が不機嫌そうに頷く。

「そのうえで、みんなそれぞれの幸せは違うんやから、それは侵したらあかん。つまりさ、人や何かを傷つけることが自分の幸せいうんは駄目や。矛盾があったら駄目やということやないか。命だけを守っても、幸せだけを守ってもあかん。両方が守られることが大事なんやと思うわ」

弘章の言葉に、美海の思考が混沌とする。

「じゃあなに、命だけが守られても、幸せじゃなければ駄目だってこと？」

港に出迎える三人の顔は清々しく、どこか精悍な表情をしていた。暑いねえ、と汗をかいた笑顔に、こんにちは、と三人が駆け寄る。渚だけがレンタサイクルを借り、四台の自転車は海のレストランを目指す。

「結局私たちは、『今』でしか生きられないと思うの。敦士くんの言うように、私が考えてることも、長い地球の歴史のなかでは無駄だっていうことも分からなくもない。それでも私は、自分の思うように生きてみたいの。何かのために、誰かのため生きてみたいの。たとえそれが儂いものだとしても。それが私だから」

「……それも結局、エゴじゃないん」

フォークを皿の上でぐるぐる回しながら敦士が言う。冷めた言葉で渚の言葉が凍る。

「……うん。そうだね。エゴだね」

「エゴでええやん！あっくんやって散々エゴやってきたんやから」

言い返す美海を、弘章が聞き取りにくい声でモ

渚が問う。

「逆に、幸せが感じられても、命が守られなかったらあかんということ？」

美海も問う。

「そう。そういうこと」

「何か、私ら騙されとらん？」

「ないない！ほやから、敦士は敦士でええんや。

渚さんは渚さんでええし。美海は美海でええし、俺は俺でええんや。みんながみんな、そのままでええんや」

さらに美海が問う。

「否定はいかん？」

「否定はええ。命や幸せを侵さない程度になら。

そしたらみんな、言いたいことが言えるやろ」

「つまり、他人の命や幸せを侵さない、自分の命や幸せも侵されないってこと？」

渚がまとめに入る。

「まあ、そういうことです」

「何か、ヒロに言われてもなー」

「騙されてる感じ」

敦士も美海も憮然とする。

「何や、それ」

そんな三人を見て、渚が小さく笑う。くるくると巻いたパスタを口に入れる。

島の頂、檀山に登る。標高三〇〇メートル越え。

この規模の島には異様な高さ。

砂利道の手前で自転車置き、あとは歩く。日の光を遮ることのない夏の登山はさすがに堪える。もう駄目、と泣きを入れる美海に、高校生が何言ってるの、と渚が励ます。そんな二人を尻目に、敦士と弘章が馬鹿騒ぎしながら競うように走っていく。

「なに小学生みたいなことやってんのよー、ちょっと待ってよー」

三六〇度、遮るものが何も無い、てっぺん。南は四国山地から、東は淡路島、北は中国山地、西は瀬戸大橋までが一望できる。その手前には、大小いくつもの島々が浮かぶ瀬戸内の海。多島海だ。「これは気持ちいいわ」

「敦士くん、形あるものは壊れて消えてなくなるって言ってたじゃない。あれからずっと考えてたんだけど、私はちょっと違う気がするの」

まだ観光地化されていない、手つかずの自然な砂浜を前に四人が座る。島の原風景だ。同じリズムで押し寄せる波音に渚の声が重なる。

「消えてなくなるなら、この島のゴミもどこかに消えてなくなるわけじゃない。でも、違うよね。処理されて、再利用されてるよね。形あるものは、消えてなくなるんじゃない。形を変えて生き続けるんだと思うの。水が蒸発して、霧になって、気体になって。それが冷えて雪とか氷になって。それが解けてまた水に戻っていくみたい」

沈思したあと、敦士が応える。

「渚さん、ダークマターいうて知ってる？」

何それ？と美海が反応する。

「宇宙空間に質量として存在しとるはずなんやけど、見えん物質」

「冬の天気さええ日には、大山が見えることもあるんやて」

「すごいねー、日本海から太平洋まで。なんか、見えるすべてを手に入れたみたい」

スマホ上のマップでは感じられないリアル感に圧倒される。暑さよりも、雄大な景色の爽快さが勝る。

「ここで夜、星を見てみたい」

遮ることのない夜空に満天の星。遠くに瞬く夜景。橋の点滅。瀬戸内の海を滑りゆく船の光跡。夜空を流れゆく夜間飛行や人工衛星の光跡。想像しても、想像しきれない。

イノシン出ますよ、と言う敦士を見て渚は、展望台の上は？と食いさがる。

蚊も出ます、と追い打ちをかける言葉に、いやらしいなー、とふくれる。

「そこまでして見たいんよ」

「だって、そんな絶景見られないよ」
「そうなのかなー、と怪訝な表情をする三人の胸のなかに、小さく灯る輝きを感じる。」

「見えないのに存在するの？」

「何それ」

美海も弘章も食いつきはするが、釈然としない。「理論上あると考えないと成り立たんのやけど。あるから、この宇宙が成立しとる」

「へー、ほんでそのダーク何かかが、なんなん」
「見えんけど存在するいうたら、形が壊れたり消えてなしなっても、見えんだけでそこに存在しとるいうんと似とるなと思て」

敦士の一人語りに、一ヶ月前のとげとげしさがなくなっていた。それを感じ取ってか、他の三人にも自然に染み込んできた。

「おじいちゃんやお父さんたち死んでしもたけど、形を変えて今、俺たちの中で生きとんかになって」

ポッと美海の胸が熱くなる。込み上げてきた思いを口にしようとするが、その前に涙がこぼれ落ちそうになる。堪えて告げる。

「なんか、あっくん、変わったね」

「そうかなあ」

惚けているのか、照れているのか、本当に分かってないのかはよく分からなかった。

熱くなったのは、きょうだいのように生まれ育ってきた弘章も同じだった。

「うん、ええ意味で変わった」

そんな素直な三人の姿に、渚の胸も熱くなる。

「俺はここに残る。残って、植村のおじさんと漁師をする。親父の後を継ぐわ」

「自然科学はやらないの？」

「やるで。そやけど、今の時代、どこにおったってネットさえあったらいくらでも学べるやん」

それは、学校や学歴という価値観や尺度を否定するのではなく、それに対する抵抗や反発でもなかった。ただ純粹に、「興味のあることを学ぶ」という自然な姿に見られた。

「そっか」

「漁師しながら、自分の思うように学んでみるわ。美海の言う地球環境やら自然破壊を、最前線のこの海で、この眼で見続けていこうと思う」

「なんやねんな敦士、格好ええやん」

「それいうて結局、都会を地方に持ち込んできただけとちゃうん」

「そうかもしれないけど、敦士が言うたようにネット環境があったら、都会におらんでもいろんなこととができるやん。だいたいこんな長閑なところで生きとった俺らがな、あんなせこせこした都会に馴染めると思うか？」

いい加減なキャラで通ってきた弘章が、最近も調子が狂う。真っ当なことを言うことが多くなり、美海も敦士も調子が狂う。

「それにあんなとは、たまにでええんや」

「なんか、もう都会人みたいなこと言いよる」

「調子こいとんちゃうぞ」

お調子者の弘章に向けて、美海と敦士から突っ込みが入る。この感じがいい、と渚は思う。

「で、美海はどうすんや」

今度は弘章が美海に問う。

「私はね——」

渚の方をちらりと見て言った。

「私、渚さんの大学受ける」

「なんかあつくくんが一番地に足が着いてる感じがな」

確かに、と吹き出すような渚の笑いが、他の三人にも伝染する。

「ヒロはどうするん」

「俺は、やっぱ東京行くわ。行って全国に仲間つくって、いろんな所を見てまわる」

「そっか」

島を離れる残念な気持ちは残るものの、どうしようもないことだということも、みんな承知のうえだ。

「いいんじゃない、島に留まるより」と歓迎し、応援しようとする美海の言葉に、弘章が返す。

「ううん、ほんでな、卒業したら島に帰ってくるわ。そんで、民宿経営する」

「えええー！なにそれ！」

意外な展開に、一同の視線が集まる。

「格好よくね？都会帰りの民宿経営って」

その言い草が弘章らしく、美海がいつものように反発をする。

「えー！」

驚く渚を楽しむかのように続ける。

「それでな、環境問題やこれからの、この星の、この島のことについてもっと真剣に考えてみる。それで私も——」

海に向けて顔を上げ言う。

「私も、この島に帰ってくるわ。大学はそれまでの修行期間」

「なんか、うれしい」

渚が両手のひらを合わせ感慨に浸っているところに、敦士から横やりが入る。

「どうせ滅びるのに？」

「あー、また言いよる」

あたたかな笑いに包まれる。

「渚さん、いろんなところに連れて行ってくださいね」

「いいわよー。じゃあまずはしっかり受験勉強しないとね」

あちゃー！と言って、美海がペロリと舌を出す。

「ほんで美海は戻ってきて何するんや」

弘章の言葉に、少しだけ真剣さを取り戻し、美海は答えた。

「それで私は——、私は、語り部になる。この島で起こったことを、ちゃんと受け継いでいきたい。広げていきたい。おじいちゃんたちが——」

説き伏せるような目で敦士を見つめる。そのままさしをしっかりと受けとめる。

「——おじいちゃんたちが命懸けで遺してくれたものを、ちゃんと受け継いでいきたい」

——せめて一矢報いたい
そう言い残し散っていった、多くの島の人たちを想った。

「そうするって、決めた」

言って今度は、青空を見上げた。

「そんなんで生活できるん？」

「できんようになったら、民宿で雇ってよ」

「何やそれ——」

再び笑いが四人を包む。

「まあ、まかせとけ！」

「あっくんは食料調達、たのんだで！」

に笑い出した。

「なにびっくりしとん」

「だって、蛇だもん」

「蛇はな、この島では水の神様で、神様の遣いいうて言われとんやで。それにそんなにこんまいし」

そう言っ、なおも三人は笑った。刹那、渚はいつか見た夢を思い出す。赤ちゃん蛇と目が合った気がした。単なる偶然だとかぶりを振り、渚も小さく苦笑いをする。赤ちゃん蛇は、もといたところにかサカサと帰っていった。

夕陽が瀬戸内の海に、ゆっくりと赤く溶けていく。

「じゃあね、みんな。二人は受験勉強頑張って」

「はい。とりあえず頑張ります」

応える弘章に、名残惜しく思う美海が続く。

「次はいつ来ます？」

次かー、と夕焼け空を仰ごうとした矢先、弘章がひと言告げる。

えっ、と虚を突かれながらも、すぐさま反応する。

「美海には敵わんわ」

少子化の波は収まらない。人口減少も続くだろう。それでも身の丈に合った、その人口に見合った生活を前提にするなら、新しい未来も描けるのではないか。その生活に見合った幸せを前提にするなら、豊かな未来が想像できるのではないか。それは、今まで追い求めてきた未来とは少し違うかもしれない。しかし、今まで見てきた未来だけが良いわけでもなければ、すべてでもない。そう考えれば、少し違った未来も悪くはない。

「できない言い訳を探すんじゃない。できる未来を探していこう」

「できる未来——」

渚の言葉に、敦士が呟く。

視界の端で何かが動いた気がした。渚が見ると、座っていた草陰からカサカサと小さな蛇の赤ちゃんが顔をのぞかせた。きゃっ、とあげた小さな声に、何事かと三人が覗き込むなり、吹き出すよう

「来週の十三日は、ここで夏祭りやるんやで」

「あ、それいいな——って、十三日か。十三日って——」

そう言っ、敦士に目をやる。その意味ありげな視線を不審に受け止め、続きを待つ。

「八月十三日っていえば、流星群」

「ああ、ペルセウス座流星群」

「そうそうそう、絶対来る。来て展望台で一晩中見る」

言い当てた敦士も、聞いていた二人も呆れ果てる。

「渚さん、なんでそんなこと知っとん」

「へへ、それが知ってるのだよ」

夜空と夜景に、流れるいくつもの星々。想像が膨らみはじめる。

私も見る！と美海。俺も見てみようかなーと敦士。俺も行く！俺も行く！と弘章。結局、翌週も四人は集まることになった。夏のイベントの決定だ。三人に向け、渚がひと声かける。

「もうみんな、仲間だからね」

三人それぞれの笑顔が、大きく頷く。

岸壁から、渚の乗った船を見送る。小さくなつていく船のあとに白く、一筋の航跡が残る。夕陽の光に反射し、白い沫の縁が薄紫に光る。自分たちの行く先を示すかのように。

「行ってしもうたな」

美海の言葉に、うん、と敦士が小さく応える。

「あ、そーいや」

そう言つて、思い出したように、美海が敦士に言う。

「おばあちゃんが、今年のお盆はうちに来てご飯でも食べないかって。おばさんと一緒に」

突然の誘いに、敦士は天を仰ぐ。

あの日以来、互いの家族同士は連絡のやりとりをするようになった。それは、祖母節子の心配りによるものだ。節子にとって敦士は、実の孫だ。これまでの空白を埋めたい思いを感じる。それは、敦士母子にとってもありがたい誘いだつた。

「うん。母さんに言うとかわ」

ろ！はい、みんな手出して」

面倒くさいなーと敦士。それでも三人の輪の中に、三つの手の甲が重なる。

「いくよー、えい、えい――」

合わせた三人の眼が結ばれ、輝きを放つ。笑顔が溢れる。

「おおおー！」

かけ声と同時に挙げられた三本の手が夕焼けに染まり、高々と天に伸びる。

あたたかいものがこぼれ落ちないように、二度三度まばたきをし、敦士は応えた。

「えー、俺は？俺は？俺だけ仲間はずれ？」

割って入る弘章が、少しの緊張を和らげる。

「ヒロは家族やないやない」

「何言うとるん、家族みたいなもんやないかい！」

「もうー、仕方ないなー」

呆れた三人の笑いが弾む。

「さてと、勉強でもするか」

「なんか、行き先が見えてるというのは、気持ちかええな」

「何言いよん。まだ何も決まっとらんのに」

二人に向けて敦士が突っ込む。

そうだった、と美海が吹き出して笑う。

「ええな、敦士はもう決まっとって」

「なめんなよ。あれでも植村のおじさん、厳しいんやから」

確かに、と苦笑する。

「私らも負けんから。さあ、みんなでかけ声や